と、行火の炭團をほりながら、

『又買つとかなくつちやいけないよ。もう炭團がおしまいぢやないか。』

『アラもう無いの？……ぢやア買つて來ませう……でも……せめて口あけを賣つてからにしたいわネ。』

『それもそうだけども、こんな晩にやアろくにお客もあるまいよ。』

『お客ツてば阿母さん！　あの子また今夜も來るでしょうか。』

『來るかも知れないネ。』

『今夜また來たら、つけてつてやるワ。ほんとに何所の子なんだろう？』

『全く變な子だねエ。』

母子わ噂をして居ると、もうその變な子わやつて來た。それわ十歳許りの少年である。

變なと云つても、顏わ人間並の、むしろ可愛い顏容をして居るし、風俗にも別に變つた所わない。たゞあまり豐な家の子とわ見えないが、それでも金わいつも十分持つて居ると見えて、蜜柑の買い方が一風變つて居る。

まづずつとやつて來ると、一ト通り店の蜜柑を見まわして、これと思うのがあると、一つ取つて直ぐ皮をむく。けれども直ぐ食べるのでわない。中の房の數をかぞえて見て、それが氣に入ると直ぐそれ丈買うが、氣に入らないと、それわおいて又別のを取つて、おなじ樣に皮をむいて、房をかぞえ、それも氣に入らないと、また次の蜜柑に手を出す。そうしてむだにむいた蜜柑の分も、代をちやんときれいに拂つて、その物わおいたまゝで、氣に入つたのだけ持つて歸るのだ。

今夜もまた例の通り、この母子の店え來ると、すぐしやがんで蜜柑を見まわした。

『入らつしやい。毎度ありがとう御座います。』

お露わまづあいそを云いかけると、

『ほんとに今夜わ寒いんでございますネ。』

と、母も側からお世辭を足した。

少年わ無言でうなづく許りで、しきりに蜜柑を選んで居たが、その中一つ皮をむきはじめたが、房の數が氣に入つたと見えて、直ぐそれの値を聞いた。

『これいくら？』

『その方わ一山十五錢でございます。』

『一山わいらないんだ。一ついくら？』

『お一つなら四錢でございますが、一ト山買つて下さいな！』

『そんなに入らないんだ。一つありやアいゝんだ。』

云ううちに五錢の白銅をほうり出して、急いで行きかける。

『モシおつりでございます。』

お露わ渡そうとするのに、少年わ見むきもせず、急ぎ足で歸つて行く。それがさも逃げる様でわあるが、また他に嬉しい事があつて、他をかえり見る間がないと云つた風でもある。

蜜柑賣の親子に取つてわ、今夜わあまり好い商賣でわない。いつもなら少くて三つ。多い時わ六つ七つもむいてから、はじめて氣に入つた房の數に出會うので、おかげで賣らない蜜柑の分までも、代をちやんともらえるのだが、今夜わ初端に房の數が氣に入つたので、たつた一つより賣れない事になる。それにつり わ入らないとも云わないのだから、まさかにだまつて取つてもおかれない。しかも今夜わ、只さえ後をつけようと云つて居た所だ。けつくそれを幸いに、

『ぢやアわたし行つて來るワ。』

と、お露わ少年のあとを追つた。

少年わまた見むきもせず、急ぎ足でサツサと行く。その間二三町許り、同じ様な夜店のならんだ、にぎやかな町を右えまがると、少し暗い横町え入つた。そこをまた一町ほどゆくと、左えダラ〳〵と坂を登つてゆく。こうして段々暗い、さびしい、人通もなければ、家も飛々になつた所え來ると、ふツと少年の姿わ消えた。

アツとお露わ思わず口走つたが、こうなると急に氣味が悪くなつて、クルリ引返すと、夢中になつてかけて歸つて、息をはずませながら、

『阿母さん、變よ』

と、聲までが調子を外づれて居る。

母わまたその顏を見ながら、

『まア何うしたんだネ?』

『アノ……よつぽど變なのよ。途中で見えなくなつちまつて。』

『どうしてさ?』

『あの、この先の横丁え入つて、少しゆく、と、左え上る坂があるでしよう。彼所まで行つたら、急に消えてしまつたの。狐ぢやアないか知ら。』

『馬鹿お云いな。』

『だつてほんとなのよ。直ぐ前で見えなくなつちまつたんですもの。』

『フウン……』

母も少し眉をよせた。

『私、急にこわくなつたから、大急ぎで歸つてきたの。』

と、お露わまだ動悸のする様に、小さい手を胸にあてゝ居る。

所え他の客がまた買いに來たので、二人わそれに紛れて、この話わしばらく途切れたが、それからと云うものわ、妙に客がつゞいて來て、珍らしく代物がはけて行き、九時頃にわもう店を疊んで、

歸つてもよい様になつてしまつた。

其時又思い出して、母わお露に向い、

『お前何所だとか云つた？　先刻の男の子の行つた所わ？』

『ソラ、あの横丁のダラ〳〵坂……』

『ア！　彼所かイ。……あの通わやつと此頃開けたんだが、元わずいぶんさびしい所だつたんだよ。』

『そら御覽なさい、だからやつぱり狐か何かよ。』

『今夜わ早いから、歸りにもう一度行つて見ようか。』

『そうねエ……阿母さんも行くんなら、私も行くワ。何だか氣になるから……』

『恰度この燈火があるから、これもつてよくしらべて見ようよ。』

と、今まで店につけて居た、魚油のランプを消さずに持ち出す。

お露わそれに力を得た様に、殘り少くなつた蜜柑の函を、用意の小車にのせて、

『ぢやア行きましようよ。』

と、ひき出した。

こうして二人わ、問題の少年の行方……と云うよりわ、むしろ正體をたしかめに、先刻の道を

と急ぐのであつた。

やがて例のダラ〳〵坂え來ると、お露わ一寸立ち止まり、

『阿母さん、恰度此邊よ。』

と、云う。其所で母わ、カンテラであたりを照らして見ると、此邊にわもう家わ無く、兩方とも枯野にうづまつた空地になつて居たが、その右の方の竹原の中に、何やら物が見えるのである。

二　怪の塔

竹原の中の何物かを見つけたお露わ、まだその正體を見定めない中から、身中に云いしれないおのゝきをおぼえた。

そして我知らず、

『お母さん！』

と、その手をにぎりしめた。

『何うしたのさ？』

母わまた叱かる様に云う。

『何だかあつてよ。』

『何所に？』

『アレ彼所に！』

指した所を母も見たが、
『石ぢやないか。』
と輕く云うのを、お露わかぶせる様に、
『いゝえ、只の石ぢやないワ。』
『そんなら何だろう?』
云いながら大膽にも、母わそつと歩を進めると、お露わ恐い物見たさに、その後からそつとついて行く。
と、母わ初めておどろいた様に、
『アラ、こんな所に蜜柑が!』
と、云う。
『何所に。』
『先刻のだよ。』
『おかしいネ。』
云つて二人の四つの眼が、一つの蜜柑の上に注がれた。その蜜柑わ石の前においてあるが、皮わ先刻剝いたまゝであるのに、中の房わ皆無くなつて居る。
『誰が食べておいたんだろう?』

と、云いながら母わ、更にその側の石を見て、はじめて一ト足後えさがつた。
『いやだよ。こりやアお石塔ぢやないの。』
と、その眉をひそめるのである。
全く此時まで、二人わ氣が付かなかつたが、その石わ小さな石塔なのであつた。けれどもそれが至つて古い型の、而も其所此所缺けくづれて居るので、一寸それとわ思われない位だ。
『お石塔ツてお墓?』
『まアそうだネ。』
『オ、いやだ。』
お露わ思わず飛退いてしまつた。
けれども流石に母わ氣づよく、ぢつと石塔を見つめて居たが、またその前の蜜柑を見て、
『誰がこんな所で食べるんだろう。まるでお供でもした様においたるもの。けれどもお供なら皮だけぢやひどいネ。恰度少し殘つてるから、ほんとに好いのを上げておこうよ。露ちやん、少し持つといで!』
『何うして?』
『何でもいゝから持つといでよ。』
『ハイ。』

お露わ曳き据えておいた車の中から、二つ三つ取り出して、それを母、の手に渡すと、母わ前にあつた皮をどけて、丁寧にその後え供えた。

所がその蜜柑わ、直ぐそこから轉げ落ちてしまう。オヤと云つて拾つて直すと、またコロ〳〵と落ちてしまう。

『おかしいネ、何うしたんだろう?』

云う中に蜜柑わ、二三度下に落ちたので、大分土によごれたから、他のを持つてこさせて供えると、それもまた落ちてしまう。

『まアいやだ。變だねエ。』

『氣味が悪いから、もう行きましようよ。』

お露わ歸りを促がした。

けれども母わ、少しわ意地になつた様に、

『もう一度持つて來てごらん! まだ殘つてる筈だから。』

『それぢやアこれわ?』

と、お露わ函の底にたゞ一つ殘つたのを、また持ち出して母に渡すと、母わまたその蜜柑を、丁寧に石塔の前に供えて見た。

すると今度わ落ちもせず、ぢつと其所に据つた許りか、何所から手も出ないのに、自然とその皮がむけたと思うと、その中の房が一つ宛なくなつて行く。まるで誰か食べて居る様に。

この不思議に母子の者わ、思わずキヤツと云つてそこを逃げると、急いで車を曳いて我が家えと急いだ。

その途中も二人わ、ほとんど物も云い得ない位、恐ろしさに胸を滿たされて居たが、やがて家に歸つて、ホツと息を吐いた時、見るとも無しに函の中を見ると、また二度のおどろきをおぼえた。それわその函の中に、殆んど大方賣り切つた筈の蜜柑が、ちやんと一杯に入つて居た事である。

『まア不思議だネ。どうしたんだろう? 今夜わよつぽど變な晩だよ。』

母のはじめてもらした言葉に、お露もまた聲をふるわせながら、

『私、何だか恐くてしようがないワ。誰か來てもらいましようか。』

と、云い出した。

『來てもらつても仕樣がないけれども……何だか氣味の悪い話だねエ。』

と、まだ顏色を青くして居る。

すると表で聲がして、

『モシ〳〵、一寸明けて下さい!』

と、戸を叩く者がある。

『どなた?』

と、聞くと、それにわ答えず。

『あけて下さい、あけて下さい！』

と、云うのが、やさしい子供の聲である。

『お母さん何うしましょう？』

お露わ不安そうに母に聞く。母わ一寸考えたが、

『かまわないよ。明けてごらん！』

『でも私、何だか恐いワ。』

『何が恐いんだネ。もう家に居るんぢやないか。』

こう云われたので仕方無く、お露わ戸口まで來たが、尙念のために、

『どなたです？』

と、また聞くと、

『先刻の代を拂いに來ました。』

と、云う。

『さきほどのお代？』

『やつぱり五錢でいゝんでしよう。』

云うかと思うと戸の隙間から、白銅が一つ入つて、板の間にカチンと鳴つたが、それつきり外で

わ聲もしない。

『まアいやだ。誰だろう？』

お露わその白銅を拾いながら云うと、

『それぢやア先刻の男の子だよ。』

『おゝ、いやだ。あの石塔の？』

云うとお露わまた白銅を投出して、母の側え走りよつた。母わお露の肩に手をかけながら、

『おさわぎでないよ。こりやアよつぽどわけがあるんだろうよ。何しろ不思議なお客様だ。』

と、しばらく考え込んで居たが、ふと思いついて、

『私思い出した事がある。一寸お經をあげて見ようよ。』

と、そのまゝ佛壇の前えと來た。

『何うするの？』

『何でもいゝからお燈明をあげとくれ！　そうしてお前も一緒にお拜み！』

云われるとお露わ、素直にお燈明をあげたり、お水を取りかえたりする。

その中に母わ正面の佛壇にむかつて、しきりに念佛をとなえはじめた。お露わ何かわからないで、同じ様に手を合わせたが、その胸の中でわ、只先刻の不思議許りがくりかえされて、此上わもうあの様な事の、幾度も繰りかえされない様にと、それを只念じて居た。

こうして母子の念佛が、やゝ半時間もつゞいたと思うと、又しても表の方で、

『モシ〳〵此所あけて。』

と、云う者がある。それが先刻の聲と同じである。

するとお露わ、はやくもそれと耳に入れたが、今度わ妙に勇氣が出て、その何者だか見度くなつた。

けれども直ぐに開けようとわしない。まだ母の氣付かないのを幸い、そつとそこを立つと臺所えまわつて、そこの高い窓から、まづおもてを覗いて見た。

するとまた驚いた。戸口の外わ畫の様に明るく、しかも其所にわ大勢の供をつれた、恰度昔の繪で見る様な、上品な稚兒姿の少年が立つて居る。

三　蜜柑長者

お露わ、

『アッ！』

と、云つたきり、開けた戸わその口と共に、直ぐにわふさぐ事も出來ず、其の場に立ちすくんでしまつた。

表の少年わニツコリ笑つて、何か云うかと思う間に、お露の體わ何うした彈みか、もう表え出てしまつて居る。

お露わ驚いて退こうとしても、もう身動きも出來なくなつた。

何所かで母の聲らしく、

『お露〳〵！』

と呼んで居るのわ聞えるのだが、それに返事さえ出來ないで居る。

その中に稚兒わ、

『お露さん！　好い所え連れてつてあげましよう。一所に入らつしやい！』

と、云う聲わ、いつも蜜柑買いに來た少年に相違無いのだが、姿があまりに變つて居るので、まだ心を許しかねて居る。

と、稚兒わ、

『何も恐い事わ無いんですよ。』

と、云いながら手をのばして、後の方をさしまねくと、今まで何所に居たか解らなかつた、立派な駕籠が擔ぎ出されて來た。

駕籠かきの男が丁寧にえしやくして、その引戸をあけると、中にわ燃える様な緋緞子の蒲團の、厚いのが二枚も重ねてあつて、何うしてもお姫様でも乘りそうに見える。

『サ、何卒お乘りなさい！』

稚兒わ云うが、お露わまだためらつて居る。

『私、こんな物に乘つた事ありませんから……』

『それならなお乘つてごらんなさい！』

『でも何だか……』

と、氣味悪そうに身を退いたが、心わ何かに引かれる様に、好奇の眼わその中を見まわした。

すると不思議にもその中に、綺麗な振袖を着たお姫様が、何所からともなく來て乘つた。

オヤと思つてその顔を見ると、それがまた鏡で見る、自分の顔そつくりである。

——と、思うと何時の間にか、自分がそのお姫様になつた様な氣がして、今わ何の遠慮する事もなく、そのまゝ駕籠に擔がれて行つた。

途中わ戸が又閉つて居るので、何所を何う來たか知らなかつたが、やがてトンと据えられて、戸を外から開かれた時わ、まるで芝居にでも見る様な、立派な御殿の玄關に來て居た。

先刻の稚兒わまた側え來て、

『サ、何卒此方え！』

と、手を取りに來たが、此の時わもう平氣になつて、そのまゝ駕籠から出されると、

『オ、よく來て下だすつた。』

と、云う聲がまた聞えるので、見ると玄關の敷臺にわ、恰度自分の母親位な年頃の、上品な女の

人が立つて居て、さも嬉しそうに迎えてくれた。

『お母様！　お待遠でしたろう。』

稚兒がこう云うと、

『夜の明けない間にと思つたので、ずいぶん心配して居ましたよ。』

と、云う。

お露わ四邊を見まわすと、その女の後にわ、若い腰元が大勢居て、何れも丁寧に頭をさげながらお露を奥えと案内する。

何の事わない、まるで芝居でもして居る様な氣で、お露わ奥えと通された。その中に席がきまると、稚兒わ言葉を改めて、

『ほんとによく來て下だすつた。然し不意の事だつたから、さぞ貴女も驚いたでしよう。然しこれも皆貴女に、今夜のお禮をしたいからです、どうぞゆつくり遊んでつて下さい！』

お露も今わ落ついて、

『お禮ツて何の事でしよう？』

と、きいて見た。

すると女わそれをうけて、

『貴女方のお蔭で、私達母子の者が、蜜柑地獄を脫けられたのです。』

と、云う。お露わ耳を立てゝ、

『ナニ、蜜柑地獄ツて……』

と、今度わ目を見張つた。

『蜜柑をあきなう貴女達でも、蜜柑地獄わ知らないでしよう。でわその譯を話してあげましようか。』

と、これから女と稚兒とわ、交る〳〵語り次いで、その由來を話してくれた。それわ次の通りである。

……

むかし此所に長者があつた。千町の畑に、萬本の蜜柑を植えて、年に千萬個の蜜柑を作つて居たので、蜜柑長者とあがめられて居たが、根が吝い質なので、如何なる者が欲しがつても、決してそれを只でわやらず、必ずいくらかの錢を取り立てゝ居た。

すると恰度同じ土地に、至つて孝行な稚兒が居た。母親一人子一人で、物しづかに世を送つて居たが、この母わまた大の蜜柑好きで、如何なる氣分の悪い時でも、蜜柑さえ食べて居れば、直ぐに心持が好くなると云う。不思議な癖があつたので、毎年蜜柑のなる時分になると、毎日の様に長者の畑え來て、その食べるだけを買つて行つた。

その中に母親わ、重い病氣に取りつかれた。こう云う時に蜜柑があれば、決して心配わないのだが、生憎にもその季節でないから、さすがの長者の畑にも、その蜜柑が一つもない。

病人わ次第に悪くなる。孝心深い稚兒わ、どうかしてそれを癒したいと、良い醫者をむかえたり、高い藥を買つたりしたので、段々蓄財を失してしまつた。そして何うやら命をつなぐ間に、漸く蜜柑の實る時候になつたが、それが手に入るようになると、今度わそれを買うかんじんの金が、もう一文も無くなつてしまつた。

病人わまた口癖の様に、

『ア、蜜柑が欲しい〳〵。』

と云う。稚兒わ聞いて居るに忍びない。

そこである日長者の所え行つて、

『今わ代を拂えませんが、どうか蜜柑を分けて下ださいませんか！』

と、頼んだ。

所が長者わ例の通り、

『自家の蜜柑わ只でわやられんよ。』

と、すげなく云つてはねつけた。

『そんな事云わないで、何うか一つ分けて下ださい、その代りお母さんがなおつて、またお金が出來ましたら、きつと代を拂います。』

と、ひつこく云うと、長者わ一寸考えたが、

『よろしい。それならこうしよう。お前が蜜柑を外から見て、中の房の數をあてるんだ。』

と、大きな籠にもつた蜜柑を、稚兒の前えかき出させ、

『さア、この中に房の數が、十三と半分あるのがあつたら、それを皆只でやろう。その代り若しまちがつたら、可哀うだがその蜜柑わやらず、而も代わ倍にして取るぞ。』

と、こう云う難題を持ちかけた。

稚兒わ一寸考えたが、

『よろしい。それぢやアあてゝ見ます。』

と、大膽にその籠に向つて、しばらく皆を見くらべて居たが、

『これです。』

『それなら剝いて見ろ！』

稚兒わそれをむくと、生憎中の房わ、十三でわなく十四と半だつた。

四　使の白鷺

長者の顏わ見る〳〵中に、まるで閻魔の樣になつた。

『それ見た事か。餘計な事を云い出して、却つて無駄な事をしおつた。さアこの蜜柑の代を拂え！　約束通り倍にして拂え！』

と、稚兒を睨めつけるのである。稚兒わもう泣き出しそうに、

『どうか堪忍して下さい！』

と、手を合わせたが聞かれゝばこそ。

『さア拂え、拂わんか！』

と、地を踏みならして催促する。

『でも……そんな事が出來ます位なら、こんな事にわ成りません』

『こんな事に成るのわ知れた事だ。それを無理に云い出したからわ、罪わ其方にあるのだぞ。……サ、拂え……拂わんか！　拂わんならば仕樣がある。今日から貴樣わおれの邸の、下男になつて働くのだぞ。』

『え、それも何卒御勘辨を……そんな事しましてわ、大切のお母さんのお世話が出來ません。』

『母の世話まで知つた事か。エイ强情者めが！』

と、云うよりはやく稚兒を捕えて、無理に今までの衣裳を脫がせ、下男の仕着をつけて、其場を去らせず、此日から、長者の邸で働く樣にさせた。

稚兒わ悔しくてならないが、鷲に見込まれた山鳩同樣、こうなつてわ何うする事も出來ない。けれども又考えた。なまじ抵抗して怪我するより、素直に此邸に使われて居たら、又その內にわあの蜜柑が、却つて容易に手に入るかも知れない。そうすれば一時の難儀も、後の爲めにわ幸福で

あろうと、稚兒わそのまゝ下男になつて、この强慾な長者の下に、追い使われる事となつたが、そのさし當りの用事わ、蜜柑畑の張番をする事であつた。

そこで稚兒わ、畑中の番小屋え入つて、早速張番をして居たが、やがて夜半頃になると、畑の方で何やら物音がした。さてわ蜜柑盜人が來たな。よし、それを追拂つたら、この褒美に一つ位わ、只で貰えない事もあるまいと、用意の棒をおつとつて、健氣にも小屋から飛び出し、音のした方え と向つた。

すると彼方の畑中の、一番大きな蜜柑の木の下に、白い影が一つ見える。それが人間らしくない。稚兒わまだ聲もかけず、そつと忍び足で寄つて行つて、尙委しく見直すと、それわ一羽の大きな鷺であつた。

鷺わ長い嘴をあげて、下から蜜柑をはさみ落して居る。

稚兒わいきなり棒をあげて、

『こらツ！』

と、云いながら追拂おうとすると、鷺わ飛び立つと思いの外、長い頸をねぢむけて、

『コレ、お待ちなさい！』

と、云う。その聲が何だか人間の樣なので、稚兒わ思わず身を縮ませて、ぢつと聲の主を見るのに、それわ何所までも鷺であるが、聲わ又人間に相違無い。

『一體お前わ何者だ？』

と、念のために聞いて見ると、

『いかにも私わ鷺ですが、實わお前のお母さんの爲めに、こうして此所え蜜柑を取りに來たのです。』

と、云う。

稚兒わ急に頼もしくなつた。

『オ、それでわ私のお母さんのために……』

『そうです。』

『でわお母さんわまだ御無事で……』

『お前さんが歸つて來ないので、どんなに案じて居らつしやるでしよう。けれども蜜柑さえ食べて居れば、元氣が出ると云うのですから、私がこうして取りに來てわ、そつと運んであげて居るのです。決して心配しない樣に……』

『それわほんとに有りがとう。そう聞いて私も安心しました。でわなるたけ好いのを選つて……』

『それわ云うまでもありません。』

『私も手傳つてあげ度いが、それでわ却つて後が面倒だから、私わ知らない風をして居ましよう。』

『ア、そうして居る方がいゝでしよう。』

『でわ何分頼みます。そうしてあのお母さんに、私の無事で居る事を、よく云つてあげて下ださい。』

『それもよく承知して居ます。』
『でわ私わ行きますよ。』
『さようなら！』
こう云つて別れをつげると、稚兒わ又元の小屋え歸つて來たが、ふと思い出して——長者が蜜柑を見せた時、房が十三と半分のがあつたら、只でやろうと云うのわ、一體何の爲めであろう。ほんとに然う云うのがあるのなら、いくら取つてもよい筈だ。しかし、それわ外からわ知れない……何うかして皮の中から、中の房の見える法わ無いか知ら。それが知れるといゝのだが……と、そんな事を考えながら、つい口に出して、
『ア、、蜜柑の外が見える法わ……』
と、獨語を云うと、
『その法を教えてやろうか。』
と、何所かで云う者がある。
稚兒わ首を擡げて、
『誰だ？』
と、聞くと、
『此所え お出で！』

と、云うのが正しく小屋の外である。
稚兒わまた外え出て、薄闇の中を見まわすと、今まで居た小屋の屋根の上で、
『此所だ〳〵！』
と、云う者がある。見ると其所に玩具の自動車のヘツドライト程に、二つならんだ目玉が見えた。それわ一羽の梟であつた。稚兒わ伸びあがりながら、
『梟さん！　お前が教えてくれるのか。』
『此所え來なさい、いゝ物をやろう。』
稚兒わあたりを見まわすと、側に恰度梯子があつたので、それわ蜜柑の高い枝にあるのを、登つて取るための道具であつたが、稚兒わ手ばやくそれを屋根えかけて、梟の側えよつて行くと、梟わ大きな頸をうなづかせて、
『オ、、よく來た〳〵。』
と、云いながら羽根の下から、自分の目玉そつくりの、圓い玉の眼鏡を出して、
『これをお前に貸してやる。これで見れば見えるのだ。』
と、云うかと思うと梟の姿わ、そのまゝ消えてしまつたが、手にわ眼鏡がちやんと殘つた。
『ありがたい〳〵。これわ好い物が手に入つた。これで明日から檢めてやろう。』
と、ためしに目にかけて見ると、暗いと思つた夜の畑わ、まるで晝の樣に見渡せる。これでわ朝

まで待つにわ及ばない。直ぐにこれから見てまわろうと、稚兒わもうイソ〳〵として、蜜柑畑えと急ぐのであつた。

五　夜の眼鏡

夜の目の主とも云われる梟に、不思議の眼鏡をもらつた稚兒わ、それを持つと直ぐ蜜柑畑え來て、まづ手近の一本を見あげた。

すると、その枝と云う枝に、黄金の鈴をつゝた様な果わ、まるでその皮をむかれてしまつた様に、その房がまざ〳〵見える。

『ヤレ嬉しや。これならば大丈夫』

と、なおも瞳をこらして見るのに、大方わ十二か十四、大きいので十六……十三半と云うのわなか〳〵見つからない。

それか、これか、其處か、此處かと、稚兒わ一心に見てまわり、算えてまわる中に、段々眼鏡の力が弱つて來て、果わ中の房わ見えず、皆皮許り見える様になつた。——それわいつか夜が明けると同時に、眼鏡の力が利かなくなつたからだ。

『アヽ、仕方がない……あとわまた晩の事にしよう。』

と、心殘して歸つたが、さてこう夜が明けてしまうと、今夜わまた氣がゆるんで、いかにも眠むたくてならなくなつて來た。これわ昨夜眠らなかつた爲めである。

で、朝の食事をすますと、もう正體がなくなつて、そのまゝ小屋の中で横になつてしまつた。

所え來たのわ例の長者だ。長者わつゝみもない稚兒の顔を見ると、吐き出す様に聲を荒らげて、

『ヤイこの腑抜けめ！　朝から居眠する奴があるか。』

と、云うと、いきなり足でその横腹を蹴つた。

稚兒わおどろいて起き上り、いそいで其處に畏まると、

『コリヤ、貴様蜜柑を取つたな。』

と、呶鳴る。

『いゝえ、そんな事わ御座いません。』

『ない事があるものか。蜜柑の數が足らんぞ。』

と、云う。

そう云われると思い當る。昨夜鷲が來て取つて行つたのを、もう見付けられてしまつたのらしい。

けれども稚兒わ何氣無い體で、

『でも、ほんとに存じませんのです。』

『そんなら誰かに盜まれたんだ。貴様があんまり眠るからだ。何のための番人だ。このたわけめ！』

と、次いで動いたのわその掌で、稚兒わ片頬をピンと打たれた。

稚兒わだまつて唇をかんで居る。

『サア來い。蜜柑の減つただけわまどわせるぞ』

と、長者わもう稚兒を引立てた。

引かれるまゝに行つて見ると、案の定驚の取つて行つたあとを、稚兒に指して見せながら、

『これでも知らんとぬかすのか』

と、こづきまわす。

けれどもそのなくなつた蜜柑わ、皆母の爲めになつて居ると思うと、こうした苦痛も耐えられない事わない。さりとて何とも答える事わできないから、只だまつて居る他わない。

長者わ尚もかさに掛つて、

『サ、これほどの證據があるのに、まだ白狀せん、太い奴だ。……何しろこの蜜柑の數だけわ、貴樣にまどわせるからそう思え！』

『でも……お金わ御座いません。』

『そりや初めから解つてる。まどえと云つても金を出せとわ云わん。その代り今日からわ、この蜜柑の側について、はやく代りの果のなる樣に、よく肥料でもやつておけ。また居眠すると聞かんぞ。』

と、云いつけて行つてしまつた。

稚兒わホツと息をついて、

まどえと云うから又どんな難題かと思つたら、代りの果をならせろと云うのか。

そんな事なら出來ない事もあるまい。

と、やがて他の番人に頼んで、肥料のやり方なぞを教わり、この日わそんな仕事で、眠むいながらもどうやら無事にすませた。

その中に待ちかねた夜が來た。今夜こそわと、稚兒わまた眼鏡を出して、宵の中から畑を見まわる。

そして昨夜驚の取りに來たのと、恰度同じ木の所まで來ると、また昨夜の驚が來て居た。

今度わ此方から聲をかけて、

『オイ〳〵、毎夜御苦勞だネ。お母さんわ變りわないか。』

と、きくと、

『エ、、段々快い方ですから御安心なさい。』

『それわ有りがたいネ。けども私わこのおかげで、今朝ひどく叱られたんだよ。』

と、長者の難題の事を話すと、驚わさも氣の毒そうに、

『それわほんとに濟みませんでしたネ。』

『昨夜わうつかり忘れて、代りの物を持つて來ませんでした。でも今夜わ大丈夫です。ちやんとおいて行きますから。』

と、云う。

『代りの物ツて何だネ？』

『これさえおいて行けば、誰が見たつて氣がつきやしません。』

と、云うので見ると、今取つた蜜柑の後え、代りの蜜柑をつけて居る。

『お前それおんなし物ぢやないの。』

『外わおんなじ蜜柑ですが……中味わみんなちがうのです。ついでに昨夜の所えもつけておきましよう』

と、今朝まで數の減つて居た所えも、それ〴〵代りの果をつけて居る。

が、今云われたのわ、念のために、例の眼鏡でよく見ると、その代りの蜜柑と云うのわ、中の房が十三半であつた。

『アヽ、これだ。この蜜柑だ。』

と、思わず云うと、驚わいそいで制して、

『シツ、默つて居らつしやい！　今この畑の蜜柑わ、みんなこれに代えてあげますから。』

と、云う中にも支度をして、

『ドレ、お母さまが待つていらつしやいます。私わこれで御免こうむりましよう。また明晩……』

と、云いのこして驚わそのまゝ行つてしまつた。

おかしい事もあるものだと、思いながら念のために、稚兒わ尙他の蜜柑を、例の眼鏡越しに改めて見たが、やはり皆十二か十四。十三半と云うのわ他にわ無かつた。

その中にまた朝になつた。長者もまた直ぐやつて來た。そして蜜柑をあらためたが、今度わ一つも減らない許りか、昨日無かつた所にも、ちやんと代りの果があるので、

『ウム、これわ感心……肥料も小言も利いたと見えるな。』

と、滿足して歸つて行つた。

その中にまた夜になると、相變らず驚が來る。そして蜜柑を取つて行くが、その代りにわ別のをつけて行く。

そしてその代りの蜜柑わ、皆房が十三半であつた。

こうした事が幾晩かつゞいた。そして遂に一本の蜜柑わ、皆果が代つてしまつたのである。

すると恰度最後の晩、梟わまた稚兒を呼んだ。呼ばれるまゝにその側え行くと、

『もうその眼鏡の用もあるまいから、私に返してもよいだろう。その代り明日になつたら、こうしてやるが可い！』

と、何やら稚兒に一策をさづけた。

稚兒わ聞いて喜ぶまい事か。この上わ早く夜が明けよ、明日になれよと待ちかまえて居る。

六　褒美の蜜柑

待ちかまえた夜明が來た。何時になく元氣づいた稚兒わ、長者の來るのを待ちかまえて居た。
とわ氣付かない長者わ、相變らずの澁い顏をして、朝の巡視にやつて來た。
稚兒わ此方から出むかえて、
『おはよう御座います。』
と、聲までが天氣と同じく、今朝わ晴々して居る。
『ウム！』
と、長者わ無愛想に答えて、蜜柑畑を一ト通りまわつて見たが、何の木にも果が一杯ついて居るので、これも段々機嫌が好くなつて來た。
『なるほど、こりやア今年も豐作だな。』
と、はじめて少し笑顏を見せた。
それを見て取つた稚兒わ、
『でわ御褒美を下ださいましようか。』
と、やつた。平生ならこんな事を、何うして此の子の口から出よう。またうつかり出そうものなら、何と云つて呶鳴りつけられるか知れない。

所が今朝わ、稚兒にその言葉を吐く勇氣も出れば、長者にもそれを容れる度量があつた。
『オ、、褒美をやらずばなるまいな。』
『きつと下ださいますか。』
『ウム、やろう。何が欲しい？』
『別に欲しいものわありません。房の十三半ある蜜柑を、みんな私がいただけばいゝんです。』
こう云うと長者わニヤりと笑つて、
『面白い。あつたらみんな貴樣にやるワ。』
『いくつあつてもいただけますネ？』
『ある丈みんな貴樣にやる。』
『それわほんとで御座いますか？』
『念にわ及ばんぞ。』
長者わあくまでも高をくゝつて云う
此所ぞと許り稚兒わ、此時聲を改めて、
『それでわこの畑中の蜜柑を、みんな私がいたゞきますよ。』
と、云いはなつた。
長者わ一寸目を圓くしたが、直ぐまた笑い出して、

『ハヽヽ、何を云うのだ。それわ房の十三半ある蜜柑の事だ。この畑中さがしたら、一つか半分位わあろう。それ丈わやると云うのだ。』

『ですから畑中の蜜柑を、残らずいたゞきますと云うのです。』

『ハヽヽ、皆が十三半だつたら、それこそ皆貴様にやるワ。』

『そのお言葉に間違いありませんネ？』

『くどいワ！』

と、長者わ叱つた。

その聲のまだきれない中、稚兒わはやくも手をのばして、近い所の蜜柑の果を、一度に三つほどもぎとつた。

長者わ驚いてこれを制して、

『コレ〳〵、そんなに取つてわいかん！』

『でも十三半の房なら、皆取つてもよいのでしょう。』

『それわよいが、中わちがうぞ。』

『イエ、たしかに十三半でございます。』

『もしちがつたら承知せんぞ。』

『ちがいましたら蜜柑の代りに、この首をさし上げます。』

『生意氣云つて、後悔するな。』

云う中にまた稚兒わ、手ばやく三つの蜜柑をむくと、

それわ皆揃いもそろつて、十三半のものであつた。

『いかゞです？』

『ウム……あたつたな。』

『でわ次をいたゞきます。』

云つてまた手當り次第に、あとまた六個ほどもぎ取つた。

『コレ〳〵、そんなに取つてわいかん！』

『でも、みんな十三半ならいゝのでしょう。』

『あらためて見ろ！　一つでもちがつて居つたら、承知せんぞ。』

と、目を見はる。

その前で又檢めるのに、これも皆十三半であつた。

『ウム……こりや妙だ。』

『でわもつといたゞきます。』

と、今度わ十二ほど一時にとつた。

『コレ〳〵、そんなに取つて何うする？』

『みんな十三半ですから。』

『まて〳〵、今度わおれが檢めてやる。』

と、長者わ自分で皮をむいて、一々丁寧に算えて見たが、生憎房の數わ當つて居た。

こうなると長者わ顏色をかえて、

『まて〳〵待て！　こりやこの木が變なのだ。今度わ他のを取つて見ろ！』

と、他の木の方を指した。こうして他の木で違つたのを取つたら、それを科に仇を討とうと云うのだ。

けれども稚兒わ平氣である。

『どれを取つてもおんなしですよ。』

と、次の木のを取つて見せる。長者わこゝぞと算えて見たが、これも房わ十三半であつた。

『それ御覽なさい！』

と、稚兒わ勝者の誇りを面に見せる。長者わまたいよ〳〵うろたえて、

『まて〳〵、それでわこれを算えて見ろ！』

と、三番目の木をさした。

稚兒わまたその枝のを取つて、しづかにむいて房の數を、わざと長者に算えさせたが、やつぱり是もおなじ數であつた。

『何うです？……此方のを試して見ましようか。』

と、稚兒わ更に四本目に近よると、長者わおしとめて、

『まつてくれ〳〵！』

と、云う。

『でも算えて見なければ解りますまい。』

『イヤ、算えんでも解つてる。』

『解つてるならみんな取りますよ。』

と、あとわかまわずどん〳〵取りはじめた。

長者わもうたまりかねて、

『こりやいかん〳〵。止めろ〳〵！』

と、引止めたが、聞かばこそ。

『でも初めからのお約束です。』

と、振りはなして取りにかゝる。長者わもう狂氣の樣になつて、力づくでも抑えようとする。そうなつてわ敵わない。

今わ稚兒も長者のために、又手込めにされようとすると、何所から來たか例の梟が、サツと舞い下つたと思うと、いきなり長者の兩の眼を、大きな羽根でふさいでしまつた。

所えまた鷲も來て、ソレ此間にと云わない許りに、稚兒に手傳つて蜜柑を取りはじめた。
目わ閉さがれても耳わ聞える。その物音でそれを知ると、長者わもう氣が氣でない。
手で梟を振まわしても、その手まで思う様に動かず。只わめいたり、もがいたりする許り、さて
何うする事も出來ない。
その間に稚兒わ鷲の力を借りて、すつかり蜜柑を取り終つてしまつた。
するとまた何所から來たか、一羽の鷲がまい下つて大きな籠を其所においた。稚兒わ喜んで、今迄
の蜜柑を皆その籠え入れると、鷲わまたそれをつかんで、高く空え舞い上り、また來てわまた運び、
こうして澤山の蜜柑を、皆運びおわつたと思うと、最後にわ稚兒をその籠にのせて、また空を飛ん
で行つたが、それわ稚兒をその母の所え送りとゞけたので、稚兒がその家に歸り着いた時わ、家わ
蜜柑で埋まつた様になつて、その中に母わさも嬉しそうに立つて居た。

七　蜜柑の功德

強慾非道な蜜柑長者の蜜柑わ、こうして孝行者の稚兒の所え、皆運び込まれてしまつたのである。
其後長者わ、此爲めに氣が狂つて、とう〳〵死んでしまつたが、その跡の家や邸わ、其幽靈が出るとか云つて、誰もよりつかなくなつたので、其儘立ち腐れになつてしまつた。

一方孝行な稚兒わ、その母の病氣もなおれば、家の運も好くなつて、果わ自分が長者に代つて蜜柑をつくる様になつたが、その畑で出來る蜜柑わ、房が皆十三半であるのが、ふしぎな因緣と云うのであろう。
こうして三年わ無事に榮えた。するとその四年目の秋に、おそろしい暴風雨があつて、蜜柑畑の蜜柑が、ほとんど皆吹きさらわれてしまつた。
そのために其年わ、少しも蜜柑が出來なかつた。これも長者の祟りであるまいかと、母親わ女だけに、そんな事を氣にかけると、また病氣になつてしまつた。
稚兒わまた一生懸命に看病したが、どうしてもその効が無く、母わます〳〵惡くなる許りだ。あこう云う時に、またあの蜜柑があつたら、鷲が居たらと、あの時の事を思い出すと、それにつれて稚兒の目にも、あの強慾な蜜柑長者の、外道の様な恐しい顏が、あり〳〵と浮んで來る様になつた。
すると、恰度盆の十六日の晩の事である。
稚兒わ母の枕許について、ぢつと看病して居ると、急に窓の外がさわがしくなつて、暴風雨が起つて來た様である。
『ア、、またはじまつたのかな。』
と、母わ身をふるわせると、稚兒も眉をひそめたが、わざと元氣を出して、
『暴風雨だつてもう恐かありませんよ。吹き倒される木がもう無いんですから。』

と、云うと、

『それと云うのもみんな此方でまねいた事だよ。』

と、又しても身を責める様に云う。

『何故そんな事を云うんです?』

『あの長者の旦那のために、せめて一度でもお墓參をするか、お念佛でも云つておけばよかつたのに……』

と、云いかけると、稚兒わそれを引取つて、

『いゝえ。私わそれよりも、あれきり驚にも梟にも會わないので、あの時のお禮を云わずに居るのが、どうも濟まないと思つてるんです。』

と、それも少しく氣が咎める様に云つた。

こんな話で、二人の上にわ、何だか陰氣な雲がかぶさつた様になつた。

外でわ相變らずザア〳〵ツと、戸を打つ雨の音がはげしい。その中に一しきりヒユーと云う風の音がすると、それに連れて何所から入つたか、例の長者がスツクと許り、二人の目の前に現われた。

すると母わキヤツと云つて、あわてゝ稚兒に取りついた。

稚兒も母を抱く様にして、そのまゝ顏を伏せたが、何故か母にわまだ長者が見える。

長者わ恐しい顏をして、

『おのれ、よくもお前達わ、私を蜜柑地獄に落したな。おかげでおれわ地獄の畑で、毎日蜜柑を作らせられて居るが、皆皮許りで身が出來ぬから、鬼共に責め立てられて、片時も休まる間わないぞ。今日わ恰度地獄の定休日、一日暇が出來たから、藪入代りに此所え來た。それわお前達を迎いに來たのだ。さアおれと一緒に來い。地獄え來て一緒にはたらけ!』

こう云うと兩の手に、親子の者の襟髪をつかんで、もう宙に吊しあげる。

『アレエ助けて〳〵!』

二人わ悶いてもかなわない。あわれ稚兒も老母も、こうしてこの暴風雨の夜に、此世から奪い去られたのであつた。

と、此所まで話すと稚兒わ、只感に打たれて石の様になつたお露に、

『それから私達二人わ、蜜柑地獄に落されてしまつたのです。』

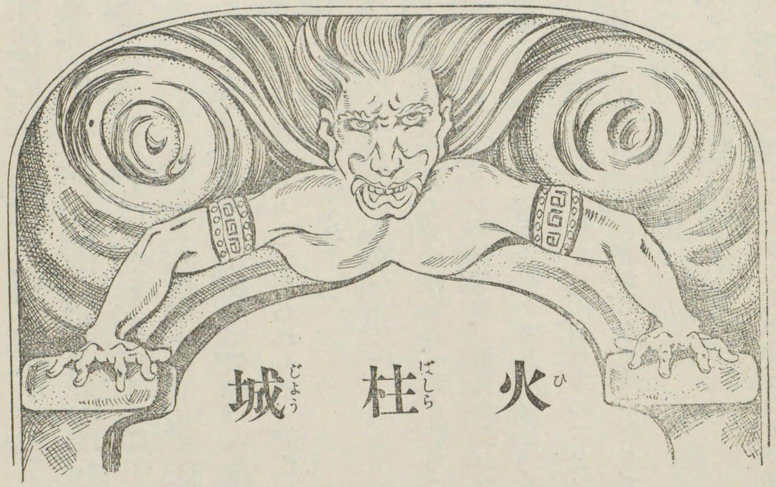
と、云うので此方もホツと息を次いで、

『そうして蜜柑地獄とわ、どんな所なのでしよう?』

と、まだ其邊にでもある様に、氣味惡そうな顏で見まわすと、稚兒わまた笑を浮べて、

『その蜜柑地獄と云うのわ、元より地獄にあるのだが、此所わもう地獄ぢやアないから、安心して居るがいゝ。それと云うのもお前さんが、毎日好い蜜柑を賣つてくれて、私達を救つてくれたのだから、そのお禮を云い度いので、それでわざ〳〵來てもらつたのさ。』

と、思いがけない事を云われて、お露わまだ不審そうに、
『その皆様をお救い申したとわ、どんな事で御座いましょう？』
『それわこうなの。蜜柑地獄と云う所わ、蜜柑で罪を作つた者が、皆落される所なのだよ。それだからせつかく蜜柑をならしても、みんな身のない物許りなのだ。けれどももしその蜜柑に、身のある物をこしらえさえすれば、罪わゆるされてしまうのだ。そこで私わ此間から、お前達の店え行つて、十三半の房の蜜柑だけ、買つて来てわ木につけると、それが一つで十三半の果になつて、立派に實つてくれたので、そのおかげで罪がゆるされて、こうして今でわ二人とも、むかしの通りの樂な身分になれたのさ。』
『して、その長者とか云う方わ？』
『その人も私達のおかげで、今でわ同じ地獄でも、少しわ樂な仕事の方えまわされて居る。』
『まア、面白いもので御座いますネ。』
と、はじめて譯が解つたので、お露も大きに興味をおぼえた。
その中に稚兒わ、母を見かえつて何か云うと、母わうなづいて、棚の上の手籠から、立派な守袋を出して來たが、
『これわお禮の印だから、何卒受取つておいて下ださい！』
と、云いながら渡したと思うと、今まで見えた稚兒も其母も、また立派な御殿も、まるで夢の様に消えて、お露わたゞ一人此間の、古い石塔の前に立つて居たが、その手にわ先刻の守袋が、ちやんと握られて居るのであつた。
此時後で聲がした。
『まアお前此所に居たの？』
云うのわ自分の母であつた。
『おつかさん！』
と、走りよつて、その手にしつかりすがりつくと、お露わ、初めて我にかえつて、そして今までのあらましを話した。
母も聞いて感に入つたが、それにしてもその守袋にわ、一體何が入つて居たのであろうと、念のためにあらためて見たら、中にわ小さな蜜柑の種が、十三と半分入つて居た。
けれどもふしぎやこの種が、母子の手に入つてからと云うものわ、毎日あきなう蜜柑が、いつもの問屋で仕入れない間に、次から次と籠に充ちて、それが皆好い蜜柑許り。おかげでこの母子わ、やがて豐かな身代になつたが、それでもまだ蜜柑屋わやめず。果わ國中一番の、大きな蜜柑問屋になつた。



火柱城

麓の茶屋

麓の茶屋には、今日も客が立て込んで居る。旅商人の様なのや、順禮らしいのや、名所廻りの様なのや、また歸省かと思われるのや——若いのや、年取つたのや、小ざつぱりしたのや、見すぼらしいのや……それが一膳飯を食うのもあれば、酒肴をあつらえるのもあり、菓子を命じて居るのもあれば、茶ばかり飲んで居るのもあつて、小僧と爺さんばかりでわ、目も廻わりそうな繁昌だ。

それと云うのも、亭主の爺さんが話上手で、手足が隙なく動いて居る間も、世間話の請賣りや、土地の自慢話などに、少しも口を休ませないから、一寸床几に掛けた氣の客も、つい聞き惚れて尻が長くなり、素通りしようと思つて來ても、つい釣り込まれて入つてしまう。思えば德のある爺さんだ。

時わ恰度午後三時頃、軒先の梧桐の木わ、はや傾いた冬の日を浴びて、葉一枚も殘さない、黒い珊瑚樹の様な影を、無作法に店の中え投げかけて居る。

爺さんわ葭簀越しに、空を一寸覗いて見たが、

『ヤア……もう間も無く暮れるかナ。山家わ殘る日が短いなア。』

と呟くように云うので、初めて氣がついた様に、床几に居た旅人達も、

『それぢやア愚圖々々して居られんぞ。爺さん茶代わ此所に置くよ。』

『私のも勘定しておくれ！』

と、皆何うやら浮足に成つて來た。

其中に只一人、隅の方の緣端に、遠慮勝ちに腰をおろして居る、十五六の少年があつた。

色の褪めた金ボタンの洋服に、眉廂の折れた學生帽、何か徽章が付いて居る様だが、それわはつきり解らない。古ぼけたズックのカバンと、それにわ不似合な新しい水筒とを、右の肩から左えと掛けて、足にわ脚絆、鞋がけ、自然木のステツキを、大切そうに側に置いて、先刻から駄菓子をムシヤ付いて居たが、他の客が居なく成つたので、初めてこの少年の方えも、爺さんが茶を入れかえに來て、

『坊ちやんわ何處え行くだネ？』

と、愛想よく相手になりに來た時、少年わはじめて口を切つて、

『僕わ火柱城え行くんだが、もう此所からわ直きだろうネ。』

と、東京辯で快活に云つた。

すると爺さんわ目を圓くして、

『何だつて？　火柱城え？』

『そうさ。』

『飛んでもねエ……火柱城ツて何だと思つてるだ？』

『火柱のお城だろう。名からして面白そうだ。』

『いかにも火柱のお城にやア相違無エ。だがその火柱やアもう三日の中に、熱が出て死んでしまうだ。飛んでもねエ。あんな所え行つて何うするツてんだ。』

と云う。

少年わそれを聞くと、何故か聲を出して笑い出した。

『アハヽヽ。お前もやつぱしそんな事云つてるネ。爺さんわやつぱし爺さんだねエ。』

『何だつて？　爺さんわやつぱし爺さん？　それわ云わずと知れた事だが、老人の云う事わよく聞くもんだ。また聞いて損の行くもんぢやねエ。悪い事ア云わねエから、あんな所え行くな止しになせエよ。お前さんわまだ若い……若いと云うよりまだ子供さんだ。それにたつた一人でもつて、あ

んな所え出かけようなんて、向う見ずにも程があるだよ。』

と、田舎者の一轍さ、眞赤に成つて叱る様に云う。

けれども少年わ耳も貸さず、

『大丈夫だよ、お爺さん！　火柱城え行つてさえしまえば、よしんば其場で死んだつて、僕の役目わ濟むんだから、うつちやつて見てエておくれ！』

と、云つてわ平氣で又菓子を食つて居る。

『何てエ強情な人だろう！……』

と爺さんわ呆れた様子で、ぢつと少年を凝視つたが、

『そんなら勝手にしなさいだが、全體また何だつて、彼所え行かなけれや成らないんだ？　その行かなけれや成らないッて事が、また道理の事ならば、憚りながら私だつて、何も別に止めやしねエ。品によつちやア案内知つた、捷徑を教えてあげねエ事もねエだ……』

と、何うやら風が變つて來るので、少年わ頼もしくなり、

『そんなら譯を云うが、實わ僕より前に、友達が一人行つたんだ。所がその友達が、何うしたんだか歸つて來ない。だから今度わ僕が行つて、その友達を探して來るのさ。』

『そりアなるほど放棄つちやおけねエ。屹度火柱に當つて、山で死んでしまつたんだ。』

『死んだなら死んだでいゝから、その死骸を引取つて來る。もし又僕も歸らなくなつて、其場で死んでしまうにしても、友達と一所なら本望だ。』

と、云う事が飽くまでも男々しい。

それを聞くと亭主の爺さんわ、ます〳〵感心して、

『ウン面白い！　死んでも友達と一所なら本望だとわ、云う事がすつかり氣に入つた。よし、そんなら行きなさい！　私が辨當こさえたげよう。そして途中まで送つてあげよう。』

と、俄にまた肩を入れて、直ぐと辨當の用意にかゝるので、少年も大いに喜び、やがてその志の、竹皮包をカバンに入れて、

『お爺さん、ありがとう。』

と、出かけると、

『まア待ちなよ、送つてあげるに……』

と爺さんわ尻を端折りながら、後から追いすがつて行く。

二　友の死骸

『馬鹿に速い足だなア。子供にも似合わねエ。私わすつかり汗に成つたゞ……』

と、漸く追いついて來た茶屋の爺わ、薄汚れた手拭を、腰から取つて額を拭きながら云う。

少年わ振り向きながら、

『そりやアお氣の毒だつたね。けれども僕わちやんと調べて來て、道もよく解つてるんだから、送つてくれるにやア及ばないのに……』

『イヤ〳〵、道ア解つてるか知らねえが、まだ解つてねエ事があるだ。私、先刻云うのを忘れたが、まだ大切な事があるだ。』

と云われて見ると、少年も氣に成る。

『大切の事とわ？』

『火柱城え行こうと云うにやア、是非無けりやア成らねエものがあるだ。それをお前さん持つてなさるかネ？』

『ウン、火柱を見る眼鏡だろう。そりやアちやんと用意してるサ。』

『それわ感心だ。だが、何樣な風に拵えたか、ドレ、ちよツくら私に見せなせイ！』

と、はや手を出して促がすので、少年もまだ歩きながら、肩からさげたカバンの中から、用意の眼鏡を出して見せた。眼鏡わ龜末な鐵緣で、玉わ眞黒な硝子である。

爺さんわ受取つて一目見ると、眉を顰めて頭を振りながら、

『駄目々々！　お前さんもこれで行く樣ぢやア、又お友達とおんなじ目に會うだア。だから云わねエ事ぢやア無エ。怜悧な樣でもまだ坊ちやんだ。いくら調べても此處にやア氣が付かねエだから。』

と、何だか譯のありそうな事を云う。

すると少年も聞咎めて、

『何だつてお爺さん！　此眼鏡ぢやア不可のかエ？』

『いかねエとも、不可とも、こんな眼鏡を掛けてつて見なせエ、なるほど火柱にやア打たれねエかも知れねエが、その代り他を見るのに、一寸先から闇に成つて、一歩でも出る事か！　直ぐと岩角を踏んまちげエて、自分で谷底え落こちてしまうだ。大方お前さんのお友達も、それで失策つたのに相違無エ。こんな物が何の役に立つだ！』

と云いながら、無造作に投り出してしまう。思わず少年わ立止まつて。さも思い當る樣に、

『ウン、そう云やアそうか知ら？　友達も此通りのを持つていつたから。』

と、獨語を口走しる。

その中に何時の間にか、二人わ大分山路を登つて、只ある大岩の出端え來かゝつて居た。

此時爺わ立ち止まつて、谷越しに彼方を見たが、前にわ峨々たる山わありながら、その半ばから雲に包まれて、嶺までわ眼が屆かない。

爺わ點頭ながら、

『坊ちやん！　見なせエ彼方の山を！　今ア雲で解らないが、天氣さえ好けりやア此處ん所から、もう火柱が見えるんだがネ。』

『エ、なに、火柱城が？』

『イヤ、驚く事わ無エだ。晝間なら大丈夫。火柱の出つこわねエから。だが坊ちやん！　私考えるに、事によるとお前さんのお友達わ、此處からでも火柱を見やしねエかネ。』

『でも眼鏡わちやんと掛けて居たから……』

『だから火柱の光の方わ、うまく避けられたか知らねエが、その代り足元の暗さに、ひよつとこの谷えでも落ちやしねエかネ。私どうもそうだと思うが……』

と、下を覗きながら、ぢれツたそうに老眼を擦つて居る。

そう云われると道理にも思われるので、少年も同じく岩角から、谷の底を見おろしたが、冬枯の木々の葉こそ無けれ、枯れた蔦や茨に遮られて、底がたしかに見られない。

『爺さん！　此處わ下りられるかネ？』

『下りて下りられねエ事わ無エだが……お前さん下まで行つて見る氣かネ？』

『だつて念の爲めだもの、僕ア一つ行つて來る。』

『そりやア道理だ。行つて見なさるが可い。だが坊ちやん！　私やア濟まねエがこれで御免蒙るだよ。……實ア一緒に行かねエまでも、此處で待つてあげてエが、何だかもう日が暮れそうだ。日が暮れると火柱が出る。出られちや大變だから、私アお先え引取るだよ。』

『ア、何卒歸つてくれ！　ほんとにいろ〳〵有難う。』

『だが坊ちやん！　お前さんも下え行つて、お友達の死骸があつたら、もう餘計な事アしねエで、直ぐに引取つて歸んなせエ。よしまた死骸が無エにしても、闇くなつたら危險だから、今日わ直ぐに引返して、また明日にも出直すが可いだ。なんぼ火柱城でも晝間見たら、陸え上つた河童も同樣、何の祟りも出來ねエだから、その間によく見屆けるが可いだ。』

『いろ〳〵親切に有難う！　それぢやア僕わ出かけるよ。』

と、云う間にもう蔦にすがつて、岩傳いに谷を下りかゝる。

それをまた爺さんわ、少時上から見おろしながら、

『氣をつけて行きなせエよ。それあぶねエ。石が動くだ。……岩が出てるによ。』

と、しきりに氣を配つて居たが、やがて少年の姿も、木の根に遮られ、岩角に隔てられて、見えなく成つてしまつた所で、再び頭を擡げると、前の山を包んで居た雲が、何時の間にか晴れて居る。

すると爺さんわ驚いて、『南無三！　城が見えて來た。』と云いながら踵を返えして、麓の方えと一散ばしり！

此方わ例の少年だ。蔦にすがり、木の根を傳い、石を辷り、岩を踏越えて、漸く谷底え來て見ると、案の定其處の草の上に、友の死骸が横わつて居る。

『ヤ、東君！』

と、思わず叫んで取りすがり、抱き起して介抱したが、はや事切れて詮が無い。

が、不圖その傍を見ると、眼鏡が外れて落ちて居る。

『さてわやつぱりあの岩から……』

と、思い當つた少年わ、此時はやくも何事か、心に案じ付いたと見えて、その眼鏡を取りあげると、暫時友達の死骸をはなれて、傍の石に腰をおろし、わざと玉を取りはづして、石の角で擦りはじめた。

三　地底の樓門

玉わ石の角で擦られて、やがてその形が變つたと見ると、少年わ再びそれを、元の眼鏡のわくえ入れたが、その時見ればこの玉わ、上の三分の二だけ黑く、下の三分の一わ白く成つて居る。

その上の黑いのわ、火柱城の火除の爲め、また下の白いのわ、闇の山路の足元を見る爲め、こうして置けば大丈夫と、少年わ獨り頷いて、更に友の死骸に向い、

『東君！　君の素志わ僕が貫き、君の仇を僕が討つてやるぞ。』

と、まだ生ある者の樣に云うと、その心が通じたか、死骸の頭わ少し動いて、

『オヽ、南君か、よく來てくれた。』

と、まるで洞の中で云う樣な、力の鈍い、而も濁つた聲で云う。

南と呼ばれた少年わ、我知らず飛び退さつて、きつと死骸を見つめたが、また徐に歩みよつて、

『何だつて東君！　君わまだ生きているのか？』

『いゝや。』

『そんなら死んでるか？』

『いゝや。』

『何だ、生きても死んでも居らん？　一體そりやア何うしたんだ？』

と、云いながら又取りすがろうとすると、

『生きるも、死ぬも君次第だ。僕わ君を待つて居たのだ。』

と、云う中にその死骸わ、そのまゝ地面えめり込む樣に、影も形も見えなく成つてしまつた。

南わいよ〳〵不審でならず。たしかにそのめり込んだ邊りと、思う所を杖の尖で、試みに二つ三つ突いて見ると、こわ如何に？　俄に山中が鳴り轟いて、而も強く搖れ出したが、その間にバツと岩が割れると、其處から焰が立ち昇つて來た。

スワ火柱だぞと、南わ急いで今の眼鏡をかけ、上の黑玉からぢつと見ると、その立ち昇つた火柱わ、見る〳〵中に眞赤な魔神と成つて、南の前に立ちはだかる。

これにわ南もギヨツとしたが、元より度胸の据わつた少年、わざと高く笑いながら、

『アハヽヽ、とう〳〵火柱の正體を、南時男が見現わしてやつたぞ。』

と云うと、魔神わニツコリ笑いながら、

『イヤ、まだそうわ云わさんぞ。火柱わ火柱、魔神わ魔神、その火柱の正體見度くば、まづ魔神に降參せい！』

と云う。

『ナニ、魔神に降參しろと？　誰がそんな奴に降參するものか。』

『なか〳〵氣の強い小僧だナ。だが貴様わ友達の、後を尋ねて來たのぢやないか。』

『そうだ。そして友達の仇を討ちに來たんだ。』

『その友達に會い度くわ無いか。』

『今會つたが、又居なく成つた。一體東君わ何處に居る？』

『それ、此處に居るのが見えんか。』

と、云う間に魔神の姿わ消えたが、それに代つて今の所に、何だかヌツと立つた者がある。然しそれわ黒い玉でわ、何とも見別が付かないから、更に白い所で見ると、こわ如何に、友の東光郎であつた。

『オ、、東君ぢやないか。』

『ヤ、南君か！』

と、思わず互いに手を握り合つたが、南わ又合點が行かず、

『東君！　君わ先刻死んでた筈だが、やつぱり生き返つて來たのか？』

と聞くと、東わ淋しい笑を洩らして、

『まだ生き返つたとも云えず、又死にきつたとも云えないんだ。』

『先刻もそんな事云つてたが、全體君わ何うしたんだ？』

『火柱城の探險に來て、火柱城の俘虜に成つたのさ。』

『ナニ、火柱城の俘虜に？　それわいよ〳〵解らんぢやないか。火柱城の火柱を見ると、卽座に燒け死ぬと云う事わ聞いたが、俘虜に成つてる事わ知らなかつた。』

『その火柱に燒けない様に、黒い眼鏡をかけて來ると、今度わ足元が見えなく成つて、皆あの岩角から落こちる。するとその谷底で、皆生捕に成つてしまうが、それから後わ生き返りもせず、又死に切りもしないと云う、苦しい境涯に居なけりや成らん。まア此姿を見てくれたまえ！』

と、云う時はじめて氣がついて見ると、東わ最初出かけた時の、探險用の服の代りに、まるで鑛山の坑夫の着る様な、汚い服を着て居るでわないか。

南わいよ〳〵不審そうに、

『成るほど、これわ姿が變つてる。何だつてこんな風俗してるんだ？』

『火柱城の俘虜になれば、みんなこう云う風俗をさせられて、毎日地の底で働かなけりや成らない。僕わ今金堀をしてるんだよ。』

『でわ火柱城の大将わ、鑛山の主もして居るのか？』

『そうだ……由來を聞くと太古の事だが、此處にある大將が居て、この山上に城を築いたのだ。其頃わまだ火柱城と云う、恐ろしい名わ付かなかつたが、ある時この山の山の神が、その城主の所へ來て、此の山にわ金が澤山あるが、まだ人間わ少しも知らない。付いてわお前が城を築いたを幸い、是からその城に金氣を現わして、人の目につく様にするから、天主の櫓を貸してくれと云つた。その時城主の大將が、快く承知してやればいゝのに、イヤそれわ御免蒙ると、意地惡く斷つておきながら、その癖山にある金わ、人に知らさず自分許りで、皆取つてしまおうと云うので、盛んに地を掘りはじめたのだ。すると山の神わ腹を立てゝ、ある時大地震を起して、その大將を城ぐるみ、谷間え落として鏖殺にしたが、それから後わ山の神も、大の人間嫌いに成つて、人さえ見れば、火柱で打つて、その命を取つてしまうか、そうでなければ生捕にして、地の底で働かせるか、二度と生かしてわ歸さない様にするのだ。』

『オヽ、それで大方解つたが、でわ今方見えた魔神が、その山の神なのか？』

『イヤ、その魔神わまたちがう。あれわ山の神の弟で、この山の木の神なのだが、山の神と仲が惡くて、機會があつたら謀反を起こし、この山を根こそぎ轉覆そうと云う、恐ろしい野心を持つて、それで味方を集めて居るので、實わ僕も此間から、彼奴の方に付いて居るのだ。』

『それで大方様子が解つた。それぢやア僕ももう一度、あの魔神に會つて見よう。』

『よし、そんなら僕が案内する。まア來て見たまえ、面白い所だから。』

と、云う中に東わし、只ある岩角え來て足踏をすると、その岩がパツと割れて、さながら噴火口を見る様に、眞赤な洞が下に見えた。と思うと南の手わ、はや東の手と組み合わされて、身わその赤い洞の中えと落ち込む。……が、別に熱い事もなく、やがて足の止まつた時見ると、前に見事な樓門がある。

四　門番の紛失

門わ嚴重な鐵の門、左右の扉にわ、恐ろしい鬼の面が付いて居て、中央に小さな鍵の穴が見えて居る。

南時男わ不思議そうに、その門を眺めて居ると、東わその肩を叩いて、

『それよりも君、此奴を見たまえ！』

と、云うので、指された方を見ると、其處にわ赤と黒との染分の洋服に、蝸牛の頭の様な、同じ色の頭巾を被つた、痩せこけた老爺が一人、長い朱塗の用心棒を側に置いて、海老の様になつて居眠をして居る。

『何だい此奴わ？』

と、南わ又呆れながら尋ねた。

東わ輕く笑いながら、

『此處の門番の野郎さ。滅多に此處え來る者が無いので、油斷してこんなに寢てるんだ。』

『起きてたらグヅ〳〵云うんだネ。』

『ナニ、起きてたつて恐い事わない。だが、此奴が鍵を持つてるんだから……。』

と、東わ側えよつて、門番の腰の邊を覗き込み、其處にさげて居た鍵を、そつとはづして取りあげるが早いか、

『占めた〳〵！　これさえありやア譯わない。』

と、やがて鍵の穴えおし込み、一つ捻ぢたらピインと云つて、門わ左右に開いてしまつた。

『さア來たまえ！　其奴が起きると面倒だから、はやく入つててあべこべに、此方から締め出してやろうよ。』

と、東わ南を促がして、足速に門の中え入り、其の儘叉門の扉を、中からドウンと締め切つてしまつた。

所が外の門番わ、今の物音に目をさましたと見えて。

『コリヤ何者だ？』

と、聲をかけた。

南わギヨツとして首を縮めたが、東わ平氣でふり向きながら、

『何者でもない、乃公だ〳〵、東光郎だよ。』

と、云つたが、外でわ首でも振つて居る樣に、

『イヤ、東さんばかりぢやない。此處に外の足跡がある。誰だ〳〵？』

と、しきりに咎める。

面倒だからもう返事もせずに、二人わ急いで駈け拔けようとすると、忽ち眼の前に火が燃え出した。

アツと云つて思わず逡巡うと、何時の間にか先刻の門番わ、その火の中から現われて、二人の前に立ち閉がつた。然し門わ開いた樣子が無い。

『ヤ、何うしてお前わ入つて來た？』

と、東が不審がつて聞くと、

『お前さんが鍵を持つてきなすつたから、自分が鍵の代りになつて、鍵の穴から入つて來たのさ。』

『なんぼ痩せつこけてるつて、よくあんな所から入れたネ。』

『其處が私の神通自在さ。またその神通が無けりやア、此處の御門わ預かれない。處でその預かつてる御門を、斷り無しに人間を連れ込んで、全體何處え行こうと思いなさる！』

と、用心棒を大地に突きながら、一寸力んで見せわしたが、下がつた目尻に齒の無い口でわ、一向威喝も利きわしない。

東わ頭から馬鹿にして、

『まアさ、爺や！　そんなにシヤチコ張らなくつてもいゝ。こう成つちやア仕方が無いから、有體に白狀するが、その代り今からわ、爺やも此方の味方に成つとくれな！　そうすれば、お前が常から見度がつてる、地の上の世界を見せてやるぜ。』

『ナニ、地の上の世界を見せる？　それぢやア味方に成つてあげよう。さ、その白狀をはやくしなさい！』

『外でもないこの人わ、南時男君と云つて、私の仲好しの友達なんだ。私が此間火柱城を見に來て、其儘行方が知れないのを、大層心配して、わざ〳〵迎いに來てくれたんだ。其處で折角來たもんだから、私が案内して、木の神樣に紹介わせ、それから機會を見あわせて、山の神を征伐し、火柱城を轉覆かえして、その山の底にある、金と云う金、寶と云う寶を、殘らず世界え出そうと云うんだ。なんと面白い企圖だろう。』

と、云うと、門番老爺わ、手を拍つたり、膝を打つたりして、さも嬉しそうに躍りながら、

『面白い〳〵！　そんなら私も半口のるベイ。なに私だつて實わその寶が欲しさに、やつぱりお前さん方位な、若い時分に此の山え來たんだが、あの火柱の火に打たれて、地の底え吸い込まれたぎり、この通り山の神の家來になつて、此處の門番をつとめて居るんだ。で、もう年齢が年齢だから、此儘地獄え落ちてしまうのも、もう間の無い事だとわ思うが、せめて今一ト目地の上の樣子を、夢

にでも可いから見て死に度いと、それで今も居眠して居た位なんだ。だが、お前さん方と一緒に、これから木の神樣の方について、それで寶も手に入れば、地の上えも出られると云うなら、こんな難有い事わないから、是非仲間に入れて下さい！』

『よし、そう話が極まつたら、善わ急げと云う事がある。お前わ此處に古くから居て、樣子をよく知つてるんだから、山の神にわ知れない樣に、木の神樣ばかりに會つて、内密で話の出來る樣に、うまく案内してくれないか！』

『いゝとも〳〵！　何しろ私わ此の地の下に、十年も住んで居る位だ。山の神樣の脱け穴から、木の神樣の隱れ場所まで、殘らず勝手わ知つて居る。それに今わ幸いと、山の神樣わ隣山の、雪解の御祝に行かれた御留守、木の神樣ばかり居らつしやるから、こんな好い機會わ無いと云うものだ。さア、先に立つて歩き出すので、南わ東と手をつなぎながら、その後から尾いて行くと、やがて見事な御殿え來た。

地の下にもこんな所があるかと、金銀をちりばめた、天井の飾りや、寶石をはめ込んだ柱の彫刻に、又しても見惚れる南と東を、門番老爺わ急き立てゝ、

『これさ〳〵、こんな所にグヅ〳〵して居て、山の神樣がお歸りになつたら、何の役にも立ちわしない。はやく〳〵！』

と、氣を揉むので、二人もやがて足速に通りぬけると、やがて大きな岩の前え出て、其處で道わつかえてしまつた。と、思うと老爺の姿わ、煙の様に消えてしまつた。

『ヤツ、何處え行きやがつた?』

と、あたりを見まわす二人の耳に、

『こゝに居るのが見えないか?』

と、その聲ばかりわするのである。

五 地下の金銀

聲ばかりして姿が見えない。二人の少年わ馬鹿にされた様に覺えて、只苦笑する許りである。

するとその目の前え、ヒヨツコリ現われた老爺がある。顏わ先刻の門番老爺だが、姿が何時の間にか變つて、以前の染分の洋服わ、只の筒袖の半纏に成り、前にわ全く魔物式だつたのが、今わすつかり人間じみて來た。

『ヤ、お前わ?』

と、二人わ呆れて見て居ると、老爺わニツコリ笑いながら、

『そう驚く事アありません。今私わ一寸行つて、木の神様にお目に掛つて來て、それから譯を話したら、木の神様もお喜びで、すつかりお許が出たんです。』

『で、その風俗わ何うしたの?』

『これわ程無く地の上に出られるから、それで地の上の風俗に成つたんです。』

『先刻の風俗が面白いぢやないか。』

『あれわ山の神様の御仕着ですから、地の上え行かれません。直ぐに罰が當つて了います。』

と、云いながら又老爺わ懷中を探つて、小さな罐を二つ出し、

『サ、坊ちやん達、此處に好い物がありますよ。』

と二人に一個づゝ渡した。

『これわ何だ?』

『何の藥だ?』

老爺わ又一つ同じ様なのを出して、

『これわ火伏の水と云つて、火柱を消す水が入つてるんです。だがこれわ使い様があるので、若しか火の無い所でこぼすと、却つてこれが火の玉になるのです。』

『そいつわ危險な話だね。』

『その代り又その火の玉が、火柱を呼ぶ火口にも成ると云う、不思議な魔力があるのです。今山の神様の留守を幸い、木の神様に教えていたゞいて、そつと御藏から盜んで來たんです。』

『それでわ木の神様が、大層加勢して下ださるんだね。』

『その代り又約束があるんです。今火柱の火を消して、この山の金銀を、お前達にやる代りにわ、此後此山わ草木が茂つて、立派な茂山になるだろう。然したといそう成つても、私の許を得ない間わ、決して木を伐つてわ成らん。ハイ伐る事でわ御座いません。と、こう云う言葉を代わして來ました。』

『なるほど木の神様としてわ、そう仰有るのも無理わあるまい。その代り地の底ゝ金銀わ、皆私達に下だされると云うんだネ。』

『これほどの寶物を、世間え出さずに埋めておくのわ、山の神の不心得だと、常から云つてらつしやいましたが、これと云うのもその昔、山の神の火柱の火で、木を燒かれた恨があるからです。』

と、門番老爺の委しい話に、二人わます〳〵力を得て、

『それで大方様子が解つた。でわはやくその火を消しに行こう。全體何處に燃えてるんだ?』

と、四邊を見渡したけれども、火の氣の見える様子わない。

が、門番老爺わ、大きな岩の根の所を、暫時物を探す様に見て居たが、やがて自分の持つて居た鑓を、その岩の根え打ちつけると、ピンと云つて破れてしまい、中から水のこぼれる代りに、眞赤な火の玉が轉げ出て、岩の根方をコロ〳〵〳〵と、轉げて廻つて行つたと思うと、そこから岩がパツと裂けて、恐ろしい地鳴と共に、凄まじい勢で、下から火焰が燃えあがつた。

所を東と南の二人わ、手ばやく先刻の鑓をあけて、その中の火伏の水を、サツと上から降りかけると、こわ如何にその火焔わ、その燃え上つた形のまゝで、皆動かない火柱と成つて、大きな珊瑚樹の林の様な物が出來た。

それと見ると門番老爺わ、

『占めた〳〵、此間にはやく下え行きましよう。下で寶を掘るんです。』

と、云いながら眞先に、その火柱を傳つて降りる。……それで少しも燒けない様だから、つゞいて二人も飛びついて見るのに、一向熱い事わない。

その中に三人共、火柱傳いに下え降りると、こわ如何に地の底にわ、山の神の家來の小人か、今までグツスリ寢て居た所を、不意に起されたと云う體で、大勢がワヤ〳〵ウヨ〳〵、唯狼狽えまわつて居る。

所え老爺わ割り込んで、

『ヤイ〳〵小人奴等!』

と、大聲で呶鳴りつけると、小人共に慄えあがつて、皆その前に平伏した。

『オ、感心々々! よく神妙に降參したな、それでわ命わ免してやる。その代りこの山の金銀を、殘らず掘つて運び出せ!』

門番老爺も此處え來ると、大層幅を利かせて云う。

小人共わ顏を見合せて居たが、

『ヘイ……掘れなら掘らん事も御座いませんが、この金銀わ皆山の神様の、大切なお寶で御座いますから……』

『それわ聞かんでも知つて居る。然しその山の神も、しまつて、この山中の寶物を、殘らず獻上する事に成つたのだぞ。』

『オヤ〳〵、左様で御座いますか。それでわ直ぐに掘り出します。』

と、小人の中でも頭分の様な奴が、何か合圖をしたと思うと、大勢の小人共わ、手に〳〵鶴嘴を持ち出して、火柱の根を掘りはじめた。すると忽ち金銀の光わ、其處にも此處にも眩い許り……。所え又小人共わ、皮の袋を澤山持ち出して來て、それに一杯詰めた上に、天秤を通してかつぎながら、岩の上えと運び出しに掛かる。

東も南も門番老爺も、今わ懷手をしたまゝで、目に餘る程の金銀を、見事に占領する事が出來た。

やがて地の下から谷間え出て、其處から山道にかゝろうとすると、

『どうもまことに濟みませんが、此處からわ何卒御免を願います。私共わ地の上え出ますと、力が拔けて役に立ちません。』

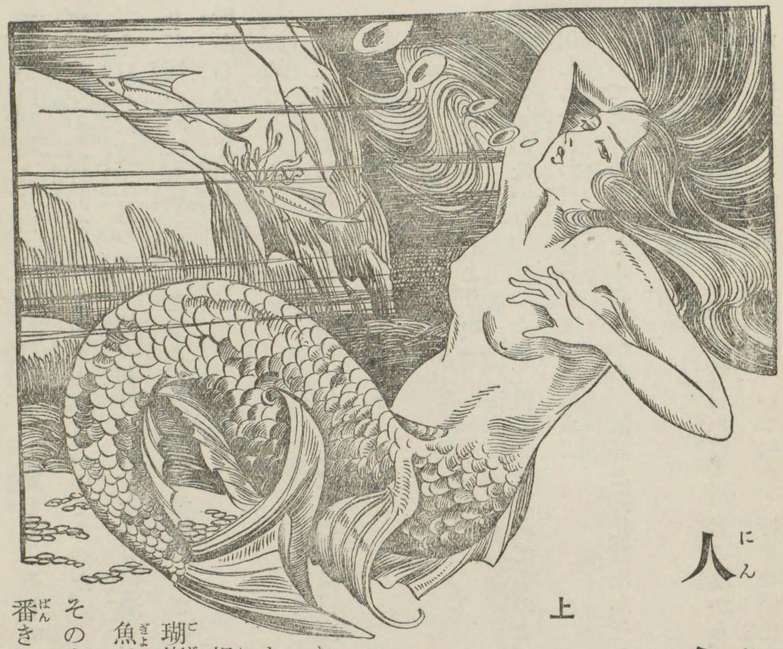
と、云いながら小人共わ、荷をおろしてしまつたと思うと、まるで栗鼠の逃げる様に、はや姿を隱してしまつた。

その後で三人わ、漸く麓まで下りて來ると、此處にわ例の茶屋の爺さんが、それと見て出迎に來て居たが、南よりも東よりも、まづ門番の老爺を見ると、我を忘れて飛びついて、

『ヤレ西兵衞さん、よく歸つて來たゞね。』

『オヽ、北右衞門、よく生きて居てくれた。』

と、さも嬉しそうに抱き合つた。これわやはり此村で、恰度東と南の様な、仲好しの友達だつたのである。



人魚の踊

上櫛の行方

東の、東の、東の端の海、そこからわ年の初の初日が、一番初めに光を放つて、海の水を底までも溫めずにわおかない。その海の底に大岩があつて、岩の根にわ澤山珊瑚樹が生えて居るが、その珊瑚樹の林の蔭にわ、太古から巣をかまえて人魚が大勢すんで居るのである。

その大勢の人魚の中に、一番若くて、そして一番きれいなのを桃目と呼んで居るが、生れつい

て膚が白珊瑚より白く、眼が眞珠よりも麗しく、そしてその頭髪が、磯の鶴の尾羽根よりも黒いので、海中の魚仲間から、皆可愛がられるのであつた。

今日わ恰度正月の元日、例の初日がいつもより色濃く、ルビイの様な色を海面に投げて、その餘りが底の岩にも屆く様になると、人魚共わ皆眠からさめて、長い髪を波になびかせながら、其所此所からおよぎ出して、

『おめでとう〳〵。』

と、年始の言葉を交わすのに、何うしたものか桃目ばかりわ、まだその姿を見せようともしない。

『どうしたんでしよう。桃目さんわ?』

『ほんとにまだ見えないのねエ。』

『まだ起きないのでしようか。』

『そんな筈わないワ。きつと御化粧に念を入れてるのよ。』

『何しろ今日わ只の日ぢやないからネ。』

『だつてあの方わ美しいのだから、餘計な御化粧なんぞしないでもいゝのに。』

などゝ口々に噂をして居る。

と、噂をすれば影がさして、桃目わ彼方の岩の蔭から、しづかに姿をあらわした。

が、何うしたものかその顔わ、いつになく冴えない色をして、髪さえ亂れたまゝである。

『桃目さん、おめでとう!』

と、ひとりの人魚がそばえよると、

『おめでとう!』

と、輕くこたえましたが、その聲わ沈んで、そして眼わうるんで居う。

『アラ何うかしたの、桃目さん?』

と、またひとりが覗き込むと、それを厭う様に顔をそむけながら、

『わたし、ほんとに何うしましよう?』

と、半分わ獨語に訴える。

『どうしたのよ、ほんとうに?』

果わ肩に手をかける友を、桃目わふりむいて抱きつく様にして、

『私……大變な事してしまつたの。』

と、はてわ泣き聲になるのである。

人魚共わ顔見合せたが、直ぐに桃目をとりまいて、

『大變な事つて、何うしたの?』

と、口をそろえて問いかけた。

桃目わ漸く涙をのんで、

『わたし……今朝髪をすこうとして……大切の櫛を折つちまつたの。』

と、また泣き出す。

『えツ、あのお母さまの遺品とか云う?』

『あのたいまいの立派な櫛を?』

『えゝ……そればかりならいゝんですけども、折れた半分がどうしたんだか、いくら探しても見つからないの。』

『それわなるほど大變ねエ。』

と、人魚わまた顔見合わせて、同じ樣に吐息をついた。

桃目わまた悲しそうに、

『お正月早々こんな事……私きつと今年中に、死んでしまうんぢやないか知ら?』

と、云いかけるとひとりわあわてゝ、

『アラ、鶴龜々々。そんな緣起の悪い事云うもんぢやないワ。』

『今日わお正月の元日よ。もうそんな事氣にしないで、櫛わ私達の貸してあげるから、はやくその髮をすいて、みんなで乙姫樣の所え、御年始に行きましようよ。』

と、しきりに慰めようとするが、桃目わまだ浮き立たない。

所え來かゝつたのわ、ヒヨウキン者の章魚坊主であつた。

『ヨウ、人魚さんお揃いだネ。まづ明けましておめで度う、相變らずと云い度いが、今日わお正月の元日だけに、相變つて一層きれいだネ。』

と、大きな頭を振りながら云う。

『オヽ、章魚坊さん! もう御年始に行つて來たの?』

『行つたとも〳〵。私わ足が八本あるから、誰よりも一番先に、ちやんと行つて御祝儀をすまして來たよ。』

『そんなら恰度いゝ。すまないがお前さんにお願いがあるのだよ。』

『お願いたア何だネ?』

『實わネ、今この桃目さんが、大切の櫛を折つちまつて、その半分が何所え行つたか、どうしたかも云われまいネ。』

『だから是非賴むよ。』

見えないんだとさ。お前さんわ他の魚とちがつて、第一目玉わ大きいし、足わ八本もあつて、それがどんなにでも動くのだから、どんな所にあつたつて、きつと見付けてくれるだろう。一つ探して來て下ださいな!』

こう云うと章魚坊わ頭を掻いて、

『いや、春早々飛んだ御用を仰せつかつたなア。だが、他ならない桃目さんの事だ、こりやア否と

『だが、うまく探して來たら、御褒美わ何だネ?』
『また慾の深い事云つてるよ。』
『どうせこんな深い海に居るんですもの、慾ばかり淺くしても居られまいぢやないか。』
『そんなら何樣な物が欲しいの?』
『まてよ、何にしようか?』
章魚坊わ一寸腕をくんだが、
『ウン御褒美にやア物わいらない。その代り望がある。』
『どんな望み?』
『望みと云うのわ他ぢやアない。桃目さんの踊が見度いんだ。』
『まア、桃目さんの踊?』
と、人魚共わ皆眼を圓くした。
すると當の桃目わ、いそいで手を振つて、
『いやよ〳〵、私そんな事いやよ。』
と、頭までもつよく振つて、そのまゝ岩の蔭え行こうとする。
章魚坊わそれを足で吸い止め、
『コレ、何を逃げるんだ。そんなら櫛わ探してほしくないのかネ?』

『でも、いや〳〵、私、踊なんぞいや。』
と、だゞける樣に云つて居る。

中似た櫛

濱にわ大勢海女が居る。その中に、わ名代の海女であつたが、今わ漸く年を取つて、若い時ほどの働きわ出來ない。その代り娘のみるめわ、その血をうけたゞけあつて、海の中での浮き沈みわ、人か魚かと疑われる位、まことに自在なものであつた。

潮まで沸くかと思われる、眞夏の頃わ云うまでもない。飛沫も凍る許りの寒の海にも、又みるめわ、何のおくする色なく、波の間に身を躍らせて、海を行くこと陸にことならず。これぱかりわ誰も眞似が出來ないので、何時かこの少女に、人魚のみるめと云うあだ名さえつけてしまつた。

折から今日わ正月の元日、仕事もずつと休みなので、みるめわ袖のある衣服に、縫立ての帶まで結んで、隣村の叔母の所まで、年始に行つた歸りみち、何氣なく濱の砂の上え來た。

此邊わ夏になると、都から海水浴に來る人達のために、簀を張つた小屋の建て並べられる所だが、今わそれも影さえとめず、只砂山の松の根ふかく、船が幾つも引きあげられて、その間にわ大きな籠が、無造作にころがしてある許りである。

みるめわいま砂濱の上に、小さい下駄の跡をおきながら、しづかに歩を運んで居たが、ふと頭がかゆい様な氣がして、それえ手をやろうとするとたんに、あやまつて櫛を落した。櫛わ親ゆづりのべつこうの櫛。年に一度の正月の外にわ、ついに挿した事のないそれである。

『アラッ！』

思わず口ばしりながら、落ちたと思う所を見るのに、何うしたのか其所にわ無い。さてわ指ではね飛ばしでもしたのかと、やゝ遠い方え目をやつたが、それでもまだ見付からない。

『ぢやア、さつき落したのか知ら？』

獨語を云いながら、元來た方え引かえして來ると、その足音に驚いて、恰度其處にあつた船の蔭え、何者か這い込んだ様に見えた。

みるめわ急いでのぞき込むと、それわ一匹の蟹であつたが、その爪にわ何かはさんで居るので、更によく見ると、それがやはり櫛でわないか。

『アラ、わたしの？』

云いながら走りよると、蟹わはやくも船の下えかくれた。けれども追われて驚いたはずみに、持つて居た物わ落したので、みるめわやがて櫛を拾いあげた。

所がその櫛わ、形も色も自分のと異つて居る。そしていかにも立派な物だ。

『まア、これ私のぢやないワ。誰のだろう？　何所からこんな物拾つて來たんだろう！』

と、しばらく見惚れて居たが、

『まア、こんな立派なのがさせたらいゝだろうねエ。』

云いながら少女氣の、うらやましそうにそれをとつて、自分の頭にさそうとすると、後の方で聲をかけるものがある。

『コレ、待つた〳〵。待ちなさい！』

みるめわ驚いて後をふりむくと、そこにわ一人の坊主が立つて居る。眼玉の圓い、口の尖つた、ついに見た事もない異形の奴が、長い手をあげてさしまねく様に、

『その櫛わ此方のものだ。』

と、云う。

『ナニ、あなたの？』

『そうだ。』

『ホヽ、おかしいわねエ。坊さんのくせに櫛なんぞ……何所えさすつもりなんだろうホヽ、』

こう云つて冷笑うと、坊主わ大きな頭をふり立てゝ、

『それでも櫛わ此方のものだ。はやく返せ〳〵！』

と、云うが、みるめわ容易にきこうとしない。

『そんな事云つたつて、私も櫛をなくした所だワ。』

『そのなくしたお前の櫛わ、これだろうがな。』
と、さしあげて見せる。それわ何時拾われたのか、たしかに自分の櫛らしい。
『まア、何所にあつて？』
『そんな事わどうでもいゝ。それわ此方の櫛だから、はやく此方え返しなさい。』
『それをくれたら返してやる。』
『返してくれたら、こつちもあげるワ。』
『いや、其方から先に返せ！』
『いゝえ、それをくれなけりやいやや。』
こんな押問答をして居る。と、『そのさばきをおれがしてやる。』と、云いながら出て來た者がある。見るとそれわ先刻の蟹だ。
『ヤイ、貴樣わ横這だな。』
『そう云うお前わ八足だろう』
『こう云う仲間に出て來られちやア、此方も正體あらわそう。いかにもおれわ龍宮の、ひようきん坊主で通つて居る、章魚の八足に相違無い。實わ人魚の桃目さんから、大切の櫛をさがすのを、わざ〳〵請合つて此所まで來たのだが、見るとこの子が持つてるから、返してくれと頼んでるのだ。』
『その櫛わ實わおれが拾つて、此處まで逃げて來た所を、うつかりこのみるめさんに、拾われてしまつた所なんだ。けども章魚坊さん、このみるめさんだつて、此邊ぢやア人魚なんだよ。桃目さんにもまけない子なんだ。その櫛わいつその事、ふたりで取りかえちまつた方がいゝぜ。』
と、思いがけない事を云い出した。

下　櫛の姉妹

眞の人魚と、人間の人魚、これわなるほど面白いとりあわせです。蟹の横這の言葉にわ、思わず章魚の八足も、手でわない足をたゝいて、
『なるほどこれわ名案だつた。』
と、賛成した。
人間の人魚のみるめわ、これを聞くと迷惑そうに、
『そんなこと云わないで、はやくその櫛返してちようだいよウ！』
と、催促したが、
『なにしろこの櫛にやア、人魚さんの踊が賭けてあるんだ。お前さんも人魚のみるめさんなら、一つ踊つて見せなさい！。そうしたら返してあげないこともないよ。』
と、章魚わからかい半分にいう。
蟹わまた眞面目になつて、

『イヤみるめさん、この坊さんに見込まれた日にやア、あの八本の足にある、八百八ツの疣に吸いつかれたようなものだ。どうしたつてのがれツこわない。仕方がないと觀念して、一つこゝで踊つてごらんなさい。そうでもしなけりやア……望みどうり、お前さんの櫛を返さないよ。』

『困るわねエ……』

みるめわ頭を傾けて、しばらく途方に暮れてしまつた、

すると、どこからか、音樂の聲が、靜かに聞えてくる。これがましかもそれが、はじめわ幽かに鳴つていたが、だん〳〵はつきり聞えるようになると、面白い曲なので、それが耳から入つた今までに、何所でも聞いたこともないくらいな、いかにも面白い曲なので、それが耳から入つたとおもうと、だん〳〵身體中に浸みこんで、はてわまるで電氣のかゝつたように、手足が動かなければいられなくなつた。

それと同時に、みるめわまるで夢見る人のように、うつとりとなつて歩みを運ばせ、波打際えとよつてゆく。そしてキツと立止まると、手ばやく衣服をぬぎすてゝ、白く泡だつ浪をこえて、サツと海の中え躍りこんだ。

『ヤ、ヤ、いよ〳〵はじめるな。』

『面白い〳〵！』

蟹も、章魚も、眼玉をみはつて、海の中を見ていると、一たん浪にもぐつたみるめわ、再びその半身を、水の面にあらわすと、そのまゝ手に藻草をふりながら、さも樂しげに踊りはじめた。先刻からの音樂が、それにつれて面白く奏でられる。

蟹も、章魚も、八つの足を、手の代りに拍ちながら、しきりに喝采をしている。

するとまた沖の方から、薄紅色の光がさして、やがて姿をあらわしたのわ、これこそ眞の人魚の桃目であつた。

桃目わ姿をあらわすと、すぐみるめの側えよつてきた。そしてその手をとつたと思うと、これからわ連れ舞になつて、あるいわ急に、あるいわ緩く、浪にからんだり、乘つたりして、舞い狂うその面白さ！　濱で見ている蟹も、章魚も、今わそれに釣りこまれて、ヒヨコ〳〵踊り出さずにわいられなくなつた。

いつの間にかその邊にわ、蛤、鮑、榮螺なんぞの、貝類をはじめとして、龜の子、海月、蝦なんぞの、仲間も大勢よつてきて、面白がつて見物している。

またむこうの岩の上、こつちの松の枝なぞにわ、鷗、みさご、乙鳥なぞまで、羽根を休めて見とれている。

その中に、音樂が靜まり、踊がやんだと思うと、踊りつかれた海女のみるめわ、そのまゝヨロ〳〵と浪間に倒れて、今にも底え沈みそうになつたが、人魚の桃目わ、手ばやくそれを救けおこして、まだ開きかけているみるめの瞼に、さも親しげなキスを與え、星のようなその眼の開いたとき、ニ

ツコリ笑いかけながら、

『みるめさん、しつかりなさい。私わ人魚の桃目ですよ。』

と、いう。

『オヽ、……先刻から一しよに踊つてくだすつた？』

『エヽ、私なの！』

『まアありがとう！』

『ナニ、お禮わこつちからいわなけれやなりません。よく私の大切な櫛を、拾つておいてくださいましたのネ。』

と、いわれてはじめて氣がつき、それわ先刻衣服を脱いだ時、その袂にいれたまゝ、濱においてきてしまつたから、

『オヽ、あれを取つてこなければ……』

と、急いで行こうとすると、

『アラ、行かないでもそこにあるぢやないの。』

と、頭をさゝれたので、驚いて手をやつて見たら、ふしぎにもいつの間にか、ちやんと髪にさしてある。

『まア、私、何時の間に？』

と、驚きながらとつてかえそうとすると、

『それが貴女の頭にあつたから、それで今まで踊れたのよ。その代り貴女の櫛わ、私の方にありますわ。』

と、いゝながら自分の髪から、桃目わ櫛をとつて見せた。

『まアどうして貴女のとこに。』

『章魚入道が浮かれているまに、こつちえ取つておきましたの。そしてこれがあつたからこそ、貴女とお話ができましたのですワ。』

『まア……』

と、まだみるめにわ腑に落ちない。

この時、桃目わ言葉をあらため、

『貴女も、海女のお仲間でわ、人魚といわれて居るぢやありませんか。そんなら今日から私と、あらためて姉妹になりましよう。そうして貴女のこの櫛を、私がさしている時わ、いつでも私わ陸えあがれ、また貴女が私の櫛を、そうして髪にさしてる時わ、いつでも海の底え來られるようにしましよう。そうして今日わ、ちようどお正月ですから、これから私がお連れして、乙姫さまにもお紹介しましよう。さアいらつしやい！』

と、手をとると、そのまゝ二人わ浪の間を、はやくも龍宮えときてしまつた。

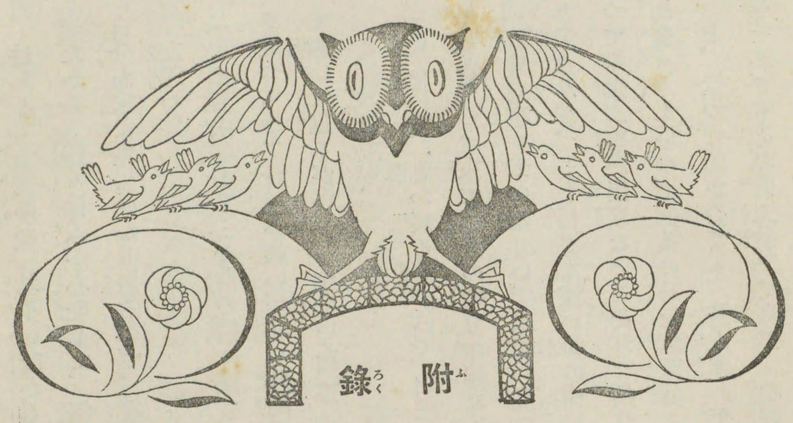
さて、そこでみるめわ、桃目の紹介で乙姫様にあうと、乙姫様も大そうお喜びで、それからいろ〳〵のお饗應がはじまり、歸る時にわいろ〳〵の御土産までくだすつて、やがて又桃目に送られながら、みるめわ濱え歸つてきた。

その時までまだこゝにいた、例の蟹と章魚わ、

『ソレみるめさんが歸つてきた。もう一度さつきのをやつてもらおう。』

と、いつたが、みるめわ手を振つてきかなかつた。けれどもこの時その頭にわ、もう自分の櫛がちやんと挿してあつた。

さてこれからというものわ、みるめわ海に入るのが、前より一そう自在となつたが、その代り今までのように、鮑や榮螺のようなものをとらず、眞珠とか、珊瑚とかいう、貴い物ばかりとつてきたから、そのためにこの邊の濱わ、一そう榮え賑わうのであつた。



附錄

運

わ天にあり、牡丹餅わ棚にありと云う諺がある。成る程牡丹餅わ棚にあるだろうが、手を出して取らなければ、口え入れて食べる事わ出來ない。恰度その通りで、運も天にあるだろうが、自分でそれを迎えようとしなければ、滅多に先方から向いて來るものでわ無い。

むかしある國に、若太郎と云う男があつた。父親の代まではわ立派な身代で、家も大きければ、地面も廣し、藏も澤山あれば、奉公人も大勢使つて、土地の者からも崇められて居たが、その父親が死んでからわ、急に家運が傾いて來て、藏も片端から空になれば、奉公人も段々減つて行つて、遂にわ廣い地面、大きな家の中に、若太郎一人ぼつちになつてしまつた。

厄鬼退治

けれども若太郎わ、幼少い時からお坊さん育で、ろくに働く事も知らず、その上大の怠者と來て居たから、偶々他人が心配して、何か仕事をさせようとしても、すぐに厭になつて廢してしまい、自分わ家に寢てばかり居るので、家わいよ〳〵貧乏する許りだ。

友達わ氣を揉んで、

『オイ若太郎……お前の樣に寢てばかり居ちやア、何時まで經つても運の直りツこわ無いぜ。斯う成つちやア仕方が無い、恥も外聞も云つてられないから、ちつと小作人の仲間えでも入つて、畑で働いて見るがいゝぢやないか。』

と、云つても、

『いんにや。私わ寢る方がいゝんだ。果報わ寢て待てツて云う事がある。こうして寢てると、今に果報がやつて來て、元の通り幸福な身の上にしてくれるよ。』

『馬鹿な事を云いなさい。果報わ寢て待てとわ、ありやア大間違いで、ほんとわ『阿呆わ寢て待つ』と云うんだ。——何でも遠い海の中に、大きな島があるそうだが、そこの島に居る鳥わ、羽根があつても飛ぶ事が出來ない。それで始終口を開いて、天から餌の降つて來るのを待つてる。あんまり馬鹿々々しいので、その鳥を信天翁と云うので、信天翁わ寢て待つとわ、それから來たんだそうだ。』

と、云つて聞かせても、若太郎わ平氣なもので

『それでもその信天翁ツて鳥が、現在餓死にも成らずに生きてる所を見ると、やつぱり天から餌の降る事があるんだ。だから私も、天から果報の降つて來るのを、斯うして寢て居て待つてるのサ。』

と、一向起きて働こうともしないから、はてわ友達も愛想を盡かし、それなら勝手にするが可いと、誰もかまわない樣に成つてしまつたが、その代り若太郎の事を、馬鹿太郎々々々と云つて惡く云わない者わ無い位に成つた。

けれども馬鹿太郎の若太郎わ、まだなか〳〵目が覺めない。なアに斯うして居る中にわ、今に幸福の神が來て下ださる。運の神が向いて居らつしやる。と、そればかりを的にして居たが、元よりこんな怠者わ、神樣も見放せば、人も爪はぢきをして助けてわくれない。その中に、貧乏わ ますます〳〵ひどくなつて、食うにも困る樣に成つてしまつた。

こう成ると流石の若太郎も、背に腹わ代えられず、下精無精に起き上つて、

『まてよ。これほど寢て居ても果報が來ないのわ、こりやア事によると此家が惡いんだナ。それにこう荒れちまつちやア、第一住み心もよくない。いつそ此家を賣り飛ばして、その金を路用にして何處か好い國え出かけて行こう。聞きやア鳥でさえ仰視いてると、天から餌が降る島があるツて事だ、おれもそう云う所え行つて。樂に一生暮し度いものだ。』

と、こう思い立つと、早速自分の家邸——先祖代々傳わつて居る、大切の家邸を人手に賣つて、それで金をこしらえて、住み馴れた故郷を後に、何處ともなくさまよい出た。否、自分でわ幸福の國、運の國、果報の來る國、天から餌の降る所と云うのを、一心に的にして出たのだ。

所がそんな甘い國わ、地圖をさがしても見つからない。人に聞いても敎えてくれない。仕方が無いから若太郎わ、昨日わ東、今日わ西と、毎日足の向く方え志して、果報をさがして廻つたが、元より初の中わ、家邸を賣つた金があるから、何處え行つても贅澤が出來るので、別に苦勞にも思わなかつたが、二十日と過ぎ、一ト月と經つと、その金も段々減つて行つて、懷中が輕く成つて來ると、そろ〳〵心細くなつて來た。

で、ある晩のことだ。ある町に宿を取つて、宿屋の奥の間で枕に就いたが、夜半にふと目が覺めたので、寢直そうと思つて、寢返りをうつと、誰とも知れず自分の側に、ごろ寢をして居る男が居る。

若太郎わギヨツとしながら、行燈の光でよく見ると、色澤の惡い、痩せこけた、如何にも貧相な奴だが、自分が目を覺ますと、先方でも小さな目をあけて、デツと此方を見て居るから、

『ヤイ、貴樣わ何者だ?』

と、一番叱りつけて見た。

するとその男わ、起き返つて居住を直したが、丁寧に辭儀をしながら、

『これわ旦那樣、御目ざめで御座いますか。』

と、云う。

『ナニ旦那樣だ? おれわ貴樣の樣な家來を連れて來た覺わないぞ。』

と、云うと、その男わ、やせこけた頰に皺をよせて、氣味の惡い笑顏をしながら、

『エ、御存じないのわ御道理で御座います。然し私わ、お目に掛つて御挨拶を致しますのこそ、今晩が初度で御座いますが、實わもう此間から、旦那樣の御側に居りますので……へ、、御ひいきになりまして有難う御座います。』

と、云いながら少し側えよつて來る。

若太郎わ薄氣味惡くなつて、

『何だと? 〳〵? おれの方ぢやア知らないが、お前の方ぢやア疾うから來てると? 全體貴樣わ何者だと云うに?』

『私わ厄鬼で御座います。』

『ナニ、厄鬼だと?』

『厄鬼で御解りが惡ければ、貧乏神と申しましよう。何しろ厄の鬼て御座いますよ。へ、、、、。』

と、云いながら、破れた、汚らしい澁團扇を出して、若太郎を煽ぎ立てると、其度に臭い風が來て、何とも云われない厭な心地だ。

若太郎わ怒るまい事か!

『誰だと思やア貧乏神か。畜生、貴樣のような奴が來てるから、おれがあんなに貧乏しちやつたんだ。さア出て行け〳〵……もう片時も側に居る事ならんぞ。』

と、無精者でも此時ばかりわ、床から跳ね起きて拳骨をふりあげ、はげしく厄鬼を追い立てると、

『行けと云うなら行きもしますが……ナニまた來るからおんなし事ですよ。』

と、減らず口を云いながら、障子の破れ目から出て行つてしまつた。

あとで若太郎わホツと一息つきながら、

『飛んでもない。何時の間にかおれの身體に、あんな奴が付きまとつてやがつた。これぢやアいくら待つてたつて、また、いくら探して廻つたつて、果報の來そうな筈もなけりやア、運に會う事も出來なかつた筈だ。だが、もうあゝして追出してやつたから、明日からわ大丈夫……あの貧乏神の代りに、幸福の神が來て家來に成るんだぞ。』

と、こんな事を樂に、其晩わ其儘寢てしまつた。

さてそれから又四五日、其處此處と廻つて見たが、一向吉い事が無い。それどころか、路用の金わ段々無くなつて來て、しまいにわ宿屋に泊まる事も出來なく成つた。

仕方が無いから若太郎わ、路傍の辻堂え來て、

『今夜わ此處で御厄介に成ろう。神樣か佛樣が知らないが、一晩お宿をお貸しなすつて下さい！』

と、云いながらにじり上つて、犬の足跡や、鼠の糞だらけに成つた、床の片隅に菰を敷き、其處にうづくまつて寢る事にした。

所が段々夜が更けると、風わ吹き込む、冷わ通る。寒くて又目が覺めてしまつた。

『ハ、ハ、ハクシヨ！』

と、思わず噴鼻をすると、誰だかまた彼方の隅で、

『ハ、ハ、ハクツヨ！』

と、小さな噴鼻をする。

『オヤ誰かまだ居るのか？』

と、思いながらすかして見たけれども、元より燈火なんぞわ無いから、闇くて少しも解らない。

その中に戸の破目から、月の光がさし込んで來たから、それでよく見直すと、如何にも自分と向いあつた隅に、小さな者がうごめいて居たが、やがて此方え動き出して來て、

『旦那樣……お目覺めですか？』

と、云うのが、何だか聞いた樣な聲だ。

『誰だ〳〵？』

『私で御座います。厄鬼で御座います、貧乏神で御座います。』

『何だ、また厄鬼か？』

と、思わず立ち上つて、戸をおしあけてよく見ると、正しく此間の痩せこけた奴だが、今夜わ月の光で見るせいか、一層顏が青ざめて、その氣味惡さわ何とも云われない。

若太郎わ腹立まぎれに、

『おのれ、此間追い出したのに、またやつて來やがつたな。』

と、叱りつけると、ニヤリと笑つて、

『へ、、今夜來たんぢやありません。始終お側に居たんですが、只貴君に見付からなかつた許り。』

『何だと？　それぢやおれが追出しても、すぐまた來て付いてやがつたのか。』

『そうです。貴君の入らつしやる所えなら、何處でも私わ參ります。』

『畜生、貴樣がつきまとやがるから、まだ幸福に會わないんだ。よし、何うするか見ろ。』

と、云いながら又打つてかゝつたが、何しろ厄鬼わ變な奴で、身體が藁で出來て居る樣に、いくら撲つても反應が無い。

そこで若太郎わ又考え、恰度辻堂の前に下がつて居る。鰐口の紐を引きちぎつて、それでもつて厄鬼の身體を、嚴重に縛りあげ、側にあつた神木の根本に、更に嚴しく括りつけて、

『さア、これなら大丈夫……もう身動きも成りやアしまい。』

と、若太郎わ塵を拂つて、又辻堂え寢に入つたが、翌朝起きて見た時わ、まだ厄鬼わ縛られたまま、さも草臥れた樣に居眠りをして居るので、もうこれならば來る氣づかいわ無いと、急いで其處を立つてしまつた。

それからまた南や北と、運をさがし、幸福を求めて廻つたが、まだとんと見付からない許りか、まず〳〵勝手が惡くなつて、その日も漸く暮れようとするのに、今度わ屋根を借りる辻堂さえ無い。

若太郎わ仕方が無いから、いよ〳〵野宿と覺悟を極めたが、『立ちよらば大木の蔭』と云う事があ
る。おなじ野宿をするならば、よく風の楯に成つて、夜露の容易にかゝらない位な、大きな木の下
に臥る事にしようと、森に入つて探して見ると、その中に、一きわ目立つて枝の茂つた、太い木が
一本あつたが、その葉わ濶い厚い葉で、樫とも見えなければ、椿とも思えない。
然し屋根と賴むにわ、こう云う木が一番だと、その下の枯草を敷いて、其處にコロリと横に成り
さて寢ようと思うのに、何う云うものだか寢付かれない。
寢付かれないと、いろ〳〵な事を考える。
『あゝ、ほんとに馬鹿々々しい。こうして此間から毎日の樣に、足を棒にして探して居るが、未だ
に幸福の國えも來なけりやア、運の都にも來合せない。こんな事ならいつその事、家え歸つて寢た
方がいゝなア。と云つた所で、其家もゝう賣り飛ばして、今ぢやアおれの物ぢやア無いから、歸つた
つて寢る事わ出來ない。……それと云うのも今までわ、あの厄鬼の貧乏神めが、おれに付きまと
つて居たからだと思うが、その厄鬼めも、昨夜の辻堂の神木に、しつかり縛りつけて來たから、も
う側にやア居ない筈だに、何うしてこう不幸なんだろう？』
と、思わず獨言を云うと、つい自分の耳の側で、
『所がその居ない筈の厄鬼わ、ちやんとお先え參つて居ります。』
と、云うので驚いてふりかえると、自分の敷いて居る枯草の上にわ、例の厄鬼がちやんと陣取つ

て、此方を見て嘲ける様に、例の淋しい笑をして居る。

『や、貴様また來やがつたナ。』

と、呟鳴りつけても、先方わ一向落着いたもので、

『また來たんぢやないよ。お前の行く所にやアきつと行き、お前の居る所にやアきつと居るまア影の様なものさね。』

と、澄ました顔で居る。

これを聞くと若太郎わ、もう打つてかゝる勇氣も無い。

『ナニ、それぢやア貴様わおれの側を、何うしても離れないんだナ……。』

『まづ影なら離れまいか。一生貴様の付き物さネ。』

『ナニ、一生離れないと？』

と、若太郎わ青くなつてしまつた。

『一生離れないとすりやア、一生おれわ不幸なんだ。』

『まづその理屈だ。』

『あゝ、何たる情無い事だろう。因果な奴に見込まれたものだなア。』

と、流石に太息をついてふさぎ込んだが、

『所詮こんな奴に見込まれた日にわ、一生運の向く譯わないから……そうだ、おれわもう諦めたもうこんな浮世わ思い切つて、此處でいつそ死んでやろう。』

と、果わ力の無い事を云い出したが、厄鬼わ相變らず冷かに、

『ウンそれも可いだろう。だがいよ〳〵死ぬとなると、こいつアおれの手甲にやア負えない。死神を一つ頼んで來なけりやア……。』

『エ、眞平だ。さんざ貧乏神につきまとわれた揚句、此上死神なんぞに來られてたまるもんか。そんな奴の厄介に成らないでも、おれわ勝手に死んで見せるぞ。』

『ハヽヽ、お前の様な意氣地無しが、見事自分で死ねるかネ。』

『死ねなくつて何うするものか。而も立派に死んで見せるぞ。』

と、云う中に若太郎わ、もう自分の帶を解いたが、大木の枝を見あげて、

『ア、先刻までわこの木の下で、今夜一トばん寢ようと思つたが、今ぢやアもう一トばん所か、幾日も幾年も、再び起きない様に寢てしまうのだ。何の木だか知らないが、今夜一晩の宿を貸して、樂に寢かしてくれる親切があるなら、どうか樂に死なしてもおくれ……。』

と、人間でも相手にする様に頼んで、夫から太い枝に帶をなげかけ、その帶を自分の首にまきつけて、いよ〳〵縊れて死ぬ事になると、厄鬼も流石にうろたえて、

『コレ、若太郎さん！　一寸待つとくれよ。そう急いちや困るぢやないか。私がお前につき纏つたのわ、一生不幸にする爲めぢやアあるが、何も命を取ろうと云うんぢやない。それにお前の様な短

氣をおこされちやア、私にも勝手が解らなくなつてしまう。ア、困つたナ。死ぬなら死ぬで仕方がないが、そんなら死神に引渡さなけりや成らない。……エイ、死神奴何處にまごついてるんだ。はやく來てくれりやいゝのに……オツト、若太郎さん……まだやつちやア困るよ……アレ、早まつちやいけないと云うに！』

と、大木の周圍をうろ〳〵して、しきりに氣を揉んで居たが、若太郎わそれに關わず、

『南無阿彌陀佛。々々々々々々！』

と、二聲三聲云つたと思うと、もうブラリと枝から下がつて、そのまゝ息わ絶えてしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊

さて若太郎わ、厄鬼に執念く付きまとわれて、一生側を離れないと聞いてわ、もう生きて居る甲斐わないと、早くも諦らめてしまつたから、まだ死神の誘いにも來ないのに、はやくも自分で首を縊つてしまつた。

で、一旦夢中になつてしまつたが、その中に氣がついて見ると、何時の間にか自分わ、立派な御殿の中え來て居る。

オヤと思つて見まわすと、正面の一段高い所にわ、冠をかぶつた恐ろしい顏の役人が、大きな口をあけて構えて居る。何だか見た樣な所だと、よく〳〵四邊の樣子を見ると、彼方にわ淨玻璃の鏡、此方にわ見る目、嗅ぐ鼻、さてわ地獄だナと思うと、思わずキヤツと云つて立とうとした。

すると左右に居た赤鬼青鬼が、

『ヤイ、控えろ！』

『御前だぞ。』

と、鐵の棒をドスンと突いたので、又腰がぬけてへたばつてしまつた。

その時閻魔大王わ、若太郎をぢつと見て、

『コリヤ、其方わ何しに來た？』

と、云う。

若太郎わ恐る〳〵、

『ヘイ〳〵、何しにだか存じませんが、只何時の間にか參つてしまいました。』

『全體此處を何處と心得居るか！』

『何だか地獄の樣で御座いますが、間違つたら御免下さいまし！』

『いかにも此處わ閻魔の廳ぢや。然し其方わ間違つて參つたナ。』

『ヘツ、間違つたと申しますと？』

『此處わ其方の來る所でわ無いのぢや。』

『オヤ……それでわ極樂え參るので御座いますか？』

『そう甘くも參らんぞ。』

『それでわ私の參る所わ、一體何方で御座いましよう?』

『何方え參るも心次第ぢや。ぢやが若太郎、其方の命わまだ盡きてわ居らぬ。まだ死ぬにわ及ばんのぢや。もう一度娑婆え歸れ!』

『ヘエ……でわまだ死んでわ成らんので御座います?』

『左樣ぢや。死んでよい時が參つたら、此方から死神を迎いにつかわす。』

『オヽ、道理であの貧乏神が、死神が來ないから待てと云つて、しきりと止めて居りましたつけ……だが大王樣、私わ娑婆え歸りますと、また厄鬼奴につきまとわれて、一生不幸で居なければ成りません。それよりわいつその事、死んでしまつた方がよろしう御座いますから、何卒特別の御捌きでもつて、私をこのまゝ御留め置き下さいませんか!』

『イヤ命數の盡きん者わ、まだ亡者で無い者わ地獄にわ置けん。尤も望みとあるならば、八大地獄を一ト通り、見せてやらん事も無いが、然し其方わ生きながら、地獄の苦艱をうけてもよいか?』

『ヘツ地獄の苦艱と申しますと?』

『まづ嘘をついた奴わ、一々舌を拔き取られる。物を盜んだ奴わ、その手に燒鐵を摑まされる。人殺しわ血池地獄、殺生わ畜生道……其他針の山、火焰の谷、……あれ〳〵あの泣聲わ、皆亡者の責められる聲ぢや。尤も其方わ、怠者でこそわあれ、嘘もつかねば、盜みもせず、沈香も焚かねば、屁もたれぬ、只意氣地無しと云う許りで、惡人と云う程でもないから、地獄でもちと扱いにくい。……それよりもう一度娑婆え歸つて、一番心を入れかえて見ろ……その上惡人となつて死んだら、改めて閻魔が引取ろう。又善人になり了せたら、極樂え迎い取られるがよい。何にしても今日の所わ、此のまゝ元の所え歸れ! コレ、赤鬼、青鬼、青鬼! 途中まで送つてつかわせ!』

と、閻魔王が頤で指圖をすると、赤鬼、青鬼わ心得て、

『コレ、亡者でわない死損い奴!』

『娑婆え歸るのぢや。立ちませい!』

と、鐵棒を鳴らして促がすので、若太郎わ仕方なく、

『それでわ大王樣、飛んだ御手數をかけました。』

と、暇乞をして立ち上ると、二疋の鬼わ左右につきそつて、やがて閻魔の廳を出た。三途の川から、六道の辻、先刻も通つて來たのかわ知らないが、何處も初度の景色なので、若太郎わ只キヨロ〳〵して居る。

その中に、道が三つに成つて居る所え來ると、鬼共わ立止まつて、

『コリヤ人間! 此處で道わ三つに成つて居る。一方わ今來た地獄道、此の左が極樂道、右わ貴樣の行く娑婆道だ。』

『これから先わもう解るだろう。道草喰わずにはやく歸れ!』

と、云うかと思うと二疋とも、もう雲に乘つて行つてしまつた。

後に若太郎わ、しばらく茫然立つて居たが、やがて氣がついて見ると、路しるべの石があつて、それに、中地獄道、右娑婆道、左極樂道と刻り込んである。

若太郎わ又考えた。

『まてよ。おれわ今思いがけない事で、地獄まで行つて來たが、序に極樂も見て來ようか知ら。此處に石が立つてるからわ、もう遠くわないんだろう。そうして其儘置いてくれられやア、それこそ願つたり、叶つたりだが、萬一斷られた所で、覗いて見る丈儲物だ。そうだ、行つて見ろ、行つて見ろ！』

と、やがて道を左え取つて、極樂えと志した。

所が不思議にもその道わ、今までとすつかり景色が變つて、山わ長閑に、野わ麗かに、花わ咲き亂れ、鳥わ啼きかわし、その上溫い風が吹いて、好い香が通つて來ると云うのだから、まるで酒にでも醉つた樣に成つて、遠いか近いかも解らない中に、忽ち立派な門の前え出た。

すると又門の中から、さも面白そうな音樂が聞える。

此方から覗いて見ると、彼方の奇麗な御殿の中にわ、天人の樣な者が大勢で、何だかしきりに舞つて居る。

又此方の見事な庭でわ、エンゼルの樣な可愛い子供が、さも樂しそうに遊んで居る。

若太郎わもう夢中に成つて。我知らず門を入ろうとすると、

『コレ〳〵、何處え行く？』

と、呼び止められた。言葉わ嚴しいが、聲わ優しい。て、若太郎わ、

『ヘイ！』

と、云いながら立ちすくむと、其處え來たのわ門番らしいが、見ればまだ年の行かない、而も可愛らしい稚兒だ。

門番の稚兒わ若太郎を見ながら、

『お前わ何處の者で、此處えわ何しに來た？』

と、云う。

『ヘイ〳〵、私わ娑婆の若太郎と申す者で御座いますが……あんまり中が面白そうなので、つい浮かれ込もうとして、まことに相濟まない事致しました。』

『ウン、それならよいが、此處わ何處だか知つて來たか？』

『此處わ極樂ぢやア御座いませんか？』

『いかにも極樂だが、お前も極樂え來たいのか？』

『ヘイ、そりやア來たいに極まつてます。ネエ坊ちやん。よければちよいと入れて下ださい！』

『いゝや、それわいかん。極樂の規則で、切符の無い者わ此門わ入れない。』

『オヤ、極樂にも切符が要るんですか？』

『そうだ。切符があれば通してやる。』

『その切符わ何處に賣つてます？』

『それわ何處でも賣つてわ居ない。みんな自分でこしらえて來るんだ。』

『そりやア何うして拵えるんです？』

と、聞くと、稚兒わ若太郎の顏をぢつと見て居たが、

『そうさねエ。敎えてあげてもいゝけれど、お前にそれが出來るか知らん？』

『ナニ、出來ない事わありません。きつと拵えて來ますから、何卒敎えて下ださい？』

と、此方わ熱心に聞きたがる。稚兒わまだ考えて居る。

その手に若太郎わ取りついて、

『ねエ坊ちやん！　後生だから敎えて下ださい。何うすりやア切符が出來るんです？　紙の札ですか、木の札ですか。それとも巾ですか、金屬ですか、それとも……』

と、若太郎わ極樂の門が入り度い一心で、何でも切符の製法を聞かなけりやア、此處わ動かないと云う意氣組だ。

それを見ると、稚兒わニツコリ頷いて、

『よろしいそれでわ敎えてあげよう。この極樂の門の切符わ、正路木と云う木と、波多羅木と云う木との葉を、よく合わせてこしらえるんで、紙でも無ければ巾でもなく、金屬でわ元より無いばかりか、只の木でも出來ないのだ。』

と、凉しい聲で云つて聞かせた。

若太郎ろそれを聞いたが、まだ一遍でわ解らない。

『ナニ、正路木に波多羅木だつて？　ついに聞いた事も無い木の名ですが、全體それわ何處の山にあるんです？』

『それまで私に聞く事わ無い、この木わみんな婆婆の木なんだから、お前が知らない筈わ無い。』

『でも、まだ見た事がありません。』

『それだからお前に出來るか知らんて、はじめツから云つてたんだ。その木が解らなけりやア切符が出來ない。切符が出來なけりやア、極樂えわ來られない許りさ。』

と、親切に云つてくれて居た稚兒も、何だか今わ無愛相になつて、若太郎に相手に成るのも、もう面倒だと云わない許りの顏をする。

若太郎わ氣が氣でない。然し今の話でわ、その二つの木わ二つとも、婆婆にある木だと云う事だ、して見れば是から行つて、よく探したら知れない事わあるまい。そうだ、前にわ幸福の神を探したり、運の神を追いまわしたりしたから、却つて厄鬼の貧乏神に取付かれたんだ。

今度わもうそれわ止めて、その正路木と波多羅木とを、一生懸命に探して見ようと、斯う分別を極

めて見ると、もうグヅ〳〵してわ居られない。

『ようござんす。それぢや坊ちやん、私わ行つて、その正路木と波多羅木の葉で、切符をこさえて來ますから、そうしたらきつと入れて下ださいよ！』

『あゝ入れてあげるとも、ナニ、その切符がよく出來りやア、此方から迎いに行つてあげる。』

『それわ難有い。ぢやア私わ拵えて來ます。』

と、元氣よく云いきると、其儘又若太郎わ、元と來た路を引かえした。

その時も亦山わ笑い、野わ霞み、花わ香り、鳥わ歌つて、何とも云われない景色であつたが、若太郎わもうそれ等の物に目もくれなければ、耳も貸さず、精出して路を急いで、やがて例の三叉路まで來た。是からわ標の石によつて、娑婆をさしてやつて來ると、今度わ景色がすつかり變つて、只何か無しに四邊が薄暗く、息わつまる、鼻わつかえる。何だか足も思う樣に運べない。

けれどもまだ娑婆らしくわ無いので、何でもはやく行き着かなければ成らんと、一心に成つて駈け出す中に何うした彈みか物に蹴つまづいて、バタリと前え轉げたと思うと、そのまゝウーンと氣絶してしまつた。

が、それも少時の間で、やがて自分の耳元が、何だかガヤガヤ喧ましく成つたから、それで漸く正氣づくと、こわ如何に!? 自分わ以前首を縊つた、あの大木の下に居て、而も自分のまわりにわ、見なれない小坊主が大勢居る。

若太郎わ驚きながら、

『何だ、お前達わ？……』

と、聞くと、小坊主達わそれを見て、

『ヤア旦那が生きかえつた。』

『オヽ、無事に御歸りに成つた。』

と、口々に云いながら、嬉しそうに寄つて來る。

此方わ樣子が解らないから、またキヨロ〳〵見て居ると、

『旦那あれを見て下ださい……彼奴わあゝしてやりました。』

と、云つて指さして見せるから、何かと思つてよく見ると、此間から自分の側に影の樣につきまとつて居た、あの厄鬼の貧乏神が、自分の代りに大木の枝で、首をくゝつて死んで居る。

『オヤ、こりやア厄鬼ぢやないか。何うして首なんぞ縊つたんだ？』

『自分で首を縊つたんぢやありません。私達があゝしてやつたんです。』

『エヽ、お前達がかい？』

と、云いながら小坊主共を見たが、まだ何者だか解らない。

『全體お前方わ誰なんだ？』

小坊主共わ口をそろえて、

『みんなこの木の實なんです。』

と、云いながら大木を指す。

『ナニ、此木の實？……と云われても解らない。この木わ一體何の木だ？』

『これわ波多羅木と云う木です。』

『ナニ波多羅木？　そいつわ有難い。』

と、若太郎わ思わず雀躍して、今更の様に木を見あげて、

『道理で此間見た時も、何の木だか解らなかつたが、これが波多羅木と云う木なのか。有難い〳〵……この木の葉が切符になるんだナ。』

と、云いながら葉を取ろうとすると、小坊主達わ急いで止めて、

『いけません〳〵。此木の葉わ取られません。』

『でも極樂の門の切符に……』

『だからその切符にわ、この木の種を地に蒔いて、それから生えた芽が伸びて、はじめて葉に成つたその葉でなければ、何の役にも立たないのです。』

と、云う。

云われて見ると仕方が無いから、若太郎わ又手を控えたが、

『そんならその種わ何處にあるんだ？』

『此處に澤山あるぢやありませんか。』

『ドレ、何處に？』

『ソレ、其處に……』

と、云いながら小坊主達が、あつちでピヨイ、此方でピヨイ、ピヨイ〳〵飛び上つたと思うと、その度に衣服を脱いで裸になり、そして再び落ちついた時にわ、皆小さな種に成つて、地上にコロ〳〵轉がつて居る。

若太郎わ喜ぶまい事か！　さてわ天のお授けと、急いでその種を拾いあつめ、これからこれを地にまいて、はやく葉の出る様にしようと、それが樂しみに成つて來たが、此の波多羅木ばかりでわ、まだ滿足な切符わ出來ない。それにわ正路木と云う木の葉が要るんだが、これわ全體何所にあるのだろう？　と、考えたがまだ見當が付かない。

で、頭を振つて考える中に、手に持つた先刻の種が、一つこぼれて地に落ちると、直ぐに又ピヨンと跳ねて、元の様な小坊主になり、

『何の御用で御座います？』

と、若太郎の前で辭儀をする。

『ヤア此奴わ面白い……呼びもしないに又出て來たナ。』

『いゝえお呼びになりました。貴君が私を地の上え、投げてお落しなさいました。それがお召し

の合圖で御座います。』

『そうか、それわ知らずにした事だが、まぐれ當りに當つたんだ。だがこうして來てくれたのわ、恰度好いから序に聞くが、お前の葉の相手になる、正路木と云う木わ何處にあるんだ？　知つてるなら教えてくれないか！』

と、聞くと、波多羅木の種わ無造作に、

『それを御存じないのですか、現在そばに寢ておきながら……』

『ナニ、側に私が寢たつて？』

『そればかりかその木の幹え、あの厄鬼を縛りつけながら……』

と、云われて見ると若太郎も、はじめて思い當つて來た。

『オ、それぢやア此間厄鬼の奴を、鰐口の紐で縛りつけてやつた、あの神木がそうなのか？』

『いかにも左樣で御座います。』

『それならナニ譯わ無い。これから行つて取つて來よう。どうも種さん有難う……』

と、云うと、小坊主わ又ピヨイと躍つて、元の種に戻つたから、直ぐに又拾いあげて、今度わも う落さない樣に、他のと一緒に袂に入れてしまつた。

* * * * *

それから若太郎わ、急いで此間の辻堂の所え來て、例の神木を見あげると、此間わ急いで居たので、よく氣が付かなかつたけれども、これにも濶い厚い葉がついて居るが、やはり珍らしい木に相違無い。

で、若太郎わ、手を伸ばしてその葉を取ろうとすると、

『待てッ……』

と、何處かで鋭い聲がする。

『オ、そうだつけ。これも枝の葉わ取られないのだナ。然し種わ何處にあるか知らん？』

と、獨語を云いながら見廻わすと、やがてこの神木が、風も無ければ地震もしないのに、ひとりユラ〳〵搖れ出して、その度に上の枝から、パラ〳〵實がこぼれ落ちて來る。

中にわ額に當つたり、耳にぶつかつたりして、少しわ痛いけれども、そんな事を厭う場合でないから、若太郎わもう大喜び、

『有難い〳〵！』

と、殘らずそれを拾いあげ、さて先刻の波多羅木の種と合わせて、それ〴〵數を算えて見ると、恰度同じ百宛あつた。

そこで若太郎わ、改めて押しいたゞいて、大切に包んで袂に入れたが、それにつけても此前わ、現在此等の木の側え來ながら、何も知らずに通り過ぎた許りか、果わその枝で首を縊つて、死んでしまおうとまでしたのわ、何たる馬鹿げた事であろう。だが、一旦死んで見たればこそ、極樂の門

口まで行つて、切符の製法も教わる事が出來たのだ。――身をすてゝこそ浮ぶ瀬があれとわ、ほんとにこうした事を云うのだ。でわ閻魔王に云われた通り、これからわ心を入れかえて、この二つの木の種を、一生懸命に育てあげて、極樂の切符を拵えなければ成らない。と、急いで自分の國え歸つて來たが、元よりもう自分の家邸わ、人手に渡つて使う事わ出來ない。

仕方が無いから他所の地面を少しばかり貸してもらい、そこえ以前の種をまいて、水をやつたり肥料をくれたり、丹精を凝らして見ると、間も無く芽が吹いて來た。

すると又以前の友達わ、一旦何處えか逐電して居た、馬鹿太郎の若太郎が、何と思つたか歸つて來て、急に働きはじめたのを見て、

『可愛い子にわ旅をさせろだ。やつぱり旅が藥になつて、漸く眞人間になつて來た。』

と、褒める者もあれば、

『馬鹿奴。何處からか碌でもない種を拾つて來て、馬鹿骨を折つて作つてるが、全體何の役に立つんだ。大方馬鹿につける藥でもあろう。』

などゝ冷笑す者もある。

けれども若太郎わ、それ等の事わ氣にも止めず、精出して作りあげると、それ〴〵立派な葉が出來た。

そこでその二種の葉を取つて、あれかこれかと合わせて見るのに、容易にうまく合つたのが無く、二百枚の中百九十九枚まで無駄になつて、やつと二百枚目の葉が、はじめてシツクリ合う樣になつた。

『オヽ、これで切符が出來た。』

と云うと、途端に空で聲がして、

『若太郎迎いに來たよ。』

と、此間の門番の稚兒が、奇麗な車を持つて迎いに來て居る。

が、若太郎わ、此間地獄え行つた時、まだ命數が盡きないと云うので、追いかえされた覺えがあるから、

『これわお迎いですみません。然しまだ私わ死なないが、それでも極樂え行けるんですか。』

と、聞くと、

『お前の心掛がよいから、生きながら極樂え迎えてあげる。そしてその切符のある間わ、何度でも往來が出來るのだ。』

と、云う。

そこで若太郎わ喜んで、取りあえず極樂え遊びに行つたが、行つて見ると又外で見たより、いかにも樂しく好い所だから、こう云う所わ自分ばかりで、樂みにするものでわないと、それから後わ國中の者に、波多羅木と正路木との作り方を教えてやり、そしておなじ國中の者わ、皆若太郎とお

なじ様に、生きながら何時でも極樂え遊びに行ける様にしてやつた。

小波お伽全集　第一卷

怪奇物語　終

昭和八年九月十日印刷
昭和八年九月三十日發行

小波お伽全集　第一卷
怪奇物語　奥付

定價金三圓

著作者　巖谷季雄　東京市芝區高輪南町五三番地
編輯者　木村定次郎　東京市代々木初臺五六二番地
發行者　吉田百邦　東京市深川區常盤町ニノ一番地
印刷者　尾崎元治　東京市深川區西六間堀一六番地

發行所　東京市深川區常盤町二ノ一番地　吉田書店出版部　小波お伽全集刊行會　電話本所七一六番　振替東京三九八六六番

不許複製

카4Y-71